を精讀さへすれば、讀みもて往くの間、自から彼が思想も、性格も、境遇も、歷然として認むることが出來やふ。否『出來やふ』では無く、『必らず出來る』のだ。

既に然りとすれば、文士は、何を以て美擧となすか。之れ亦た、自らそが著作の上に顯れて居る。即ち文士の以て美擧となすところのものは、百人は百人迄が『戀』に關する場合で。實に、文士の美擧は、道德家、若くは宗敎家等の夫とは、其の間雲泥の差を存し。而して殆んど總ては美擧と呼ばれずして『艶聞』てふ光榮ある名稱を與へらるゝのだ。

鬼淚陰士や、董子孃と、比翼連理の契を結んだ後といへども、己を愛する美婦だにあれば、些の思案も無く、

『御身の爲めならば、何の此の身が惜からふ』

と、宛如古への忠臣が、其の身を捨て、主君に事へまつる、秋霜烈日の氣慨か。さては信義を重んぜる烈士が、其知已の爲めに、水火の中をも厭はぬ意氣込。實に戀人よりの命令とさへ言へば、篠つく雨も、家を吹き飛ばす風も物かは。戀人の爲めになる事なれば、催鬼も怖れず、凍餓も事とせぬ剛の者。其名は忘れたが、同類の閨秀畫家により、キユピツト（戀神）の征矢を送られ、どゝのつまり、

『御身の愛は、余をして、余の妻を失はしむるに足れり。されど御身は、果して永久に、余の心をして、空しきを感せざらしむや……』

斯んな熱誠、外に溢れたる文字さへ送ることに成つた。文士ならずして、そも〳〵何處の物好か、輕々しく連れ添ふ妻を離別して迄、他人の愛に感謝するであらふ。之をしも美擧と言はねば、美擧の範圍や、はた其價値や、甚だしく低減する恐はあるまいか。

戀人に對する献身的行動、換言すれば、キユピツトに對する献身的忠順、

之れが即ち文士の美擧である。去りながら、元田東野では無いけれども、僕等とて、どうやら

『詩文また忠孝天性に發す。彼章句に拘々たる者、與に論ずるに足らず』

と言ひたくなる。また人若し葉適の

『文章世敎に關せずば、美なりとも益なし』

の言に想到し、默思一番すれば必らずや幇間文學の、何物を社會に貢獻するや。はた無主義を以て主義となす文士の、人生に於ける眞價如何をも、明らかに認識することが出來るであらふ。

且つ夫れ十七世紀後半期にありて、道德家として、其名內外に喧傳せられたる、ラ、ブルーヤーの言ひけん

『眞理は、人をして、力あり、自然に近く、且つ雅致ある文學を成さしむる、最上の指導者なり』

との言は、蓋し心ある人の、齊しく是認するところであらふ。從て眞に文士として、光榮ある生涯を送らんと欲すれば、總てに先だち、

『如何にして我は、眞理の光明に浴し得るや』

てふ、一大工夫を運らすの要は、之を否認する者はあるまい。併し俗氣紛々たる凡庸文士にありては、眞理を喋々し、世敎を彼是云ふは、以ての外の心得違い、實に斯くの如くにしては、到底成功することは出來ぬ。

『かつがれたる文士』

以上の所說は、當然左の如き斷案を生ずるであらふ。

『俗氣紛々たる文士は、無主義を以て主義と成し、幇間的呼吸に熟達す可し。かの眞理を以て最上の指導者と成し、世敎に關する

文を作るが如きは。蓋し稀世の出。到底ハイカラ流、ニキビ先生の企及し得るところにあらず』

去りながら、僕等をして人生の眞相を思ひ、社會の眞義を察し、而る後吾人は、如何なる文士を要求すべきかを考ふるの時には、未だ曾て、元田東野の言、葉適の語、並にラ、ブルーヤーの言に、想到せざるを得ぬのだ。して見れば、戀人に對する献身的行爲の如きは、素より所謂三文文士、獨特の美學に過ぎざるのであらふ。

遮莫、眞理を以て最上の指導者となすが如き、眞正なる文士に就ては、多く語るだけが野暮。實のところ、語りて面白く、また語られて趣味あるのは、どういしても幇間文士である。

幇間文士の稱、既に奇を極めて居る。夫れにまたしても『かつがれたる文士』と來ては、之れ洵に一段の進歩。惟ふに文士諸君は、さて〳〵烏峯と言ふ奴は、餘程文士を惡口したがる性分ぢやと、陰居樣らしき御小言を賜はるかも存ぜぬが。一體事實を、其の儘表白するが僕の天性、竹を割つたやうな心底、見せることが出來るものなら、御覽に入れたいのだ。そも〳〵『かつぐ』と言ひ『かつがるゝ』と言ふ言葉は、未だ乳の香の去らぬ青二才までが、日常口にするところのもので。中學の一年坊主

『一つ先生をかついでやつた』

と言へば。二階住居の茶の湯の師匠も

『あの方には、甘くかつがれましたよ』

と言ふ。而して『かつぐ』の意味は、改めて申までも無く『虛構を以て、思ふ壺に嵌る』に外ならぬのだ。然らば『かつがれたる文士』とは、即ち何人か狡黠なる者の虛構に僞がれ、そが思ふ壺に陷つた、誠に氣の毒な文士としか聞へまい。

由來『かつがゝる者』は、天地開闢の當初より『お人好し』と相場が定り。科學的に說明すれば、即ち自尊性盛んにして、常に、恐らく自分位才能ある者は、無からふと輕信し、誰が何と言はふが

『馬鹿言へ、そんな理屈が在てたまるものか』

と一言の下に貶し。てんで相手にせぬのが『かつがゝる者』の特性である。ところが斯ふ言ふ連中に限つて、符節を合はした如く、至つて才能が足らぬものだ。

若し此に人あり

『斯の事件は、君の助力を得るにあらずんば、到底完成を期すことが出來ぬ』

なぞと、八重に膝を屈して、賴まれやうものなら、自尊性盛んな先生、大に上氣上つて

『其の事件とは何です、お話し下さい。拙者の腕に適ふことなら、敢て勞を惜むやうなことは致しません』

斯ふ來ては、既にもう見事、かつがれて居る。惟ふに『かつぐ』は罪、『かつがゝる』は馬鹿である。而して文士は、其の三文たると、百文たるとを論ぜず、總じて自尊性强く。從て其の甚だかつがれ易きは、人生、人多しといへども、蓋し文士の右に出づる者は無からふ。

這般の消息を解せる、賢明なる新任知事殿、一つ文士を手に入れて、十二分宜しく、吹張して貰はふと、妙な企てを起し。早速招待狀を發し、自宅に盛宴を張つたのであつた。而るに藝者が悉く浮氣根性の者と定つて居らぬ如く、文士の中にも、たまには非幇間的文士も無いとは限らぬ、もと〳〵知事殿の考では、

『乃公の權威を以て招致したら、一人殘らず、推參するに相違無か

ら ふ。』

と、大に文士を安く買て居たが。さて愈々の場合になつて見ると、平素溫厚篤實の譽ある、二三の名文士は、列席せぬといふ始末。而して悅び集つたは、揃ひも揃つて、無主義を以て主義と成すてふ、秘訣を心得た幇間文士ばかり。頭相から面相、さては挨拶までか、觀る人をして、よくも斯ふ、幇間然たることが出來たものだと、徐ろに、其の修養宜しきを得たのを、嘆美せしむるのだ。

そこで、招待せられた文士の感謝と來ては、眞に人の肺腑を衝く趣がある。口を齊うして『風流知事』と稱し奉り。或は、そが文學上に於ける、識見の高遠なるを謳ひ。或は趣味の博くして、潔きを嘆じ。甚だしきに至つては、

『我々文士といへども、到底及び難し』

なぞと叫んで居る。

一體、斯く盛んに感謝の辭を、ものするに至つたのは、要するに一は、幇間的思想より來たつたので、白地に申せば、今後とも何分宜敷、御引立を願ひ奉るてふ慾氣と。また一は、恐れ多くも乃公は、知事殿の招待を辱ふした、光榮ある文士なりと、世間に知らせたい、自尊性より來たので。要するに文士の幇間的思想と、そが自尊性とを、上手に利用し、以て自己を吹張して貰つた知事殿こそ、眞に賢明な政治家と申上げざるを得まい。之は一例だが、所詮文士の殆んど總ては、實に幇間的思想てふ、利を見てなさゞるは勇無きなり底の、棒にも箸にも掛らぬ根性を有しながら。猶ほ何分にも自尊性が强ので、動もすると、斯くの如くかつがるゝのだ。抑々幇間は、そが天職として、人をかつぐ可き者。而るに幇間文士は、却りて常に人よりかつがるゝ始末。之れ所謂似而非なる者か、さて〳〵

人士は可憐なる動物なるよ。

『向の惡き養子候補者』

かつがれ易き、可憐なる文士は、兎角精を出して働くのが、何より嫌いなので。年から年中、

『何處ぞ財産家で、美人の婿に、貰てくれる處は無いか知らん』

斯ふ腐心して居るのだ。

由來世人は、『小糠三合あらば、養子に往くな』などと、妙な瘠我慢の鼻を高めらるゝものゝ。若し文士の性格と境遇とを察知したら、まさか、養子口を詮索しつゝある文士に向ひ、

『汝の如きは、倶に天を戴く可き者にあらず』

なんかと、叱り飛ばす譯にも往くまい。實に懶惰なる文士が、遊んで贅澤せんため、斯ふ養子口を探して居るもの深く文士の眞相に立ち入て精察すれば、誰とて理の當然たるを認むるであらう。

鬼涙隱士、とう〳〵董子嬢に逃げ出され、今では、下宿屋の二階に、悄然運命の變轉を思ひめぐらして居る。

『何が奇なればとて、運命程奇なるものは無からふ。殆んど押掛流に舞ひ込んだ、董子嬢、朞年にも達せず、臀に帆掛けて、逸走すると言ふ話。あゝ孔聖釋尊といへども、恐らく、運命の奇なるを見ては、愕然たらざるを得まい』

理屈は、何とでも捏らるゝものさ。

運命觀は、一轉して、處世觀となつた。

『運命の奇は、奇としたところで、貧と定まつた文士の境遇、もう、熟々嫌に成つた……あゝ何處ぞ、よい養子口は無いものかな』

文士の悲慘なる境遇に就ては、既に詳述したが。たとへ三文々士ならずとも、眞に大家ならざる限り、半歲筆を執れば、他の半歲は、遊んで暮せるなぞ言つた、餘裕ある生活は、絕對に禁止せられてあるのだ。夫こそ筆耕同樣、年から年中、賣文の筆を運ばせねば、餓死を免れ難き習はせ。そこで濫作する、濫作の結果は、想が枯るゝ、洵に『哀れと言ふも愚かなり』とは、斯んな事を指したものであらふ。さればこそ、カーラキルは

『間斷無き濫作は、思想を死せしむ』

との言を以て、世の文士を警誡したのであつた。併し文士ならぬ僕等には、這般の消息、餘りよくは分らぬけれど、其の道の方々に取つては

『カーラキル、恐らく自己の經驗を表白したのだらふ、成る程尤なことを言つた』

斯ふ感嘆せらるゝに、違い無いやうな心地もするのだ。

惟ふに鬼淚隱士の如きは、必らずや、もう二年三年の過去に於て、既に早く思想が枯れ果てたのではあるまいか。道理から言へば。年を經れば經るだけ、想も老熟し、文も練達し、去年よりは今年、來年は今年よりも、益々名作を世に出すことが出來る筈である。而るに特り、鬼淚隱士のみならず、世の多くの文士連や、年を追つて、益々駄作を出すのが事實と成つて居るのだ。察するところ、この事實は、蓋しカーラキルにより與へられたる警誡の、至當にして有理なるを、最も明白に立證せるものと、認めて差支はあるまい。

菫子嬢には逃げ出され、思想は枯れて、机に對しても一向に筆が動かぬ、眞に可憐な鬼淚隱士。御年三十五六といへば既に四十面。其の四十面を持ち出して、養子口の詮議。一方から言へば、洵に滑稽至極ぢやが、また他の一方から察すれば、洵に同情の淚を灑がざるを得ぬ次第。さ

では上帝も、隱士の境遇を哀れと思し召してか、一日、同鄕出身の銀行家を訪れた時

『君は文士ぢやで、多方面に交際しとるぢややうふ。就ては斯々の商人が、目下女婿を探しとるが、適當な人物が心當りあるまいかね』

斯く聞くや隱士、久振りで血が動き出した心持。實は

『善は急げ、此の拙者では、善過ぎますかな』

斯ふ出やふとしたが。幾ら自尊性が旺盛で、且つ幇間的思想によりて、自から鐵面皮を作り得とは言ふものゝ、まさかに、そう打ち開くる譯にも往かず。其の日はそのまゝ、赫々たる希望の光明に浴しつゝ、宅に歸つたのであつた。

歸つたは歸つたが、嬉しまぎれに、食物も喉を通らず。床に入つても眠られぬ。併し流石は小說家だけあつて、考が緻密である。床中千思萬考の結果、銀行家の叔母の口を藉りて、先方に自分を紹介せしむることに企てた。

事は上々吉、叔母も諾し、銀行家も諾したのである。

そこで銀行家は、日曜の朝、先方に出馬し、適當の紳士があると觸れ込み、最近の寫眞を差出したのであつた。

年齡も好し、風貌も好し、學歷も相當、而るに、先方の返答が情け無い。

『誠に適當な人物らしいですが、併し職業が文士では……切角ではありますが、お斷り申します。』

文士――何故養子口の向が、爾く惡いのであらふ。僕等には、素より詳かに其所以が分らぬけれど。由來幇間的思想を懷き、自尊の念旺盛、加ふるに懶惰の習、既に性と成つた文士が。さなくとも、御し難き婿と成

て、圓滿なる結果を生じ能はざるは、蓋し常識ある者の、容易に察知し得る事理ではあるまいか。

勿論養子口の向が惡いと言つて、直ちに文士は惡漢なりなどと、速斷する譯には往かぬ。されど僕等を以て之を見るに、男子苟しくも、養子に所望せらるゝ位の、人物にあらずんば、到底事を成し、榮ある生涯を送ることは出來まい。之れ素より僕等の、斷言して憚らざるとである。

別段說明する迄も無いが、總體養子に所望せらるゝ連中は、必らずや、人格から見ても、學業から見ても、はた風采から見ても、拔群の者に相違無いのだ。さりながら、養子に所望せらるゝのと、養子口を望むのとは、素より全く別事である。實に養子に所望せらるゝ人物の、模範的紳士に近きは、之を相察するに難くは無いが。併し幾ら養子に所望せらるゝ人物でも、自から養子口を詮議するやうな考がありては、鬼淚陰士に比し、兄たり弟たりで、矢張り同じ穴の中の貉。識者は斯る男子を、腑甲斐なしと貶するのである。

遮莫、養子の向が惡い文士の境遇、たとへ善智識ならずとも、少しく人心ある者、誰しも同樣、是非に濟度してやりたいものだと、心私かに思はぬはなかろふ。

『文士は何を最も恐るゝか』

一寸考へたところでは、文士の最も恐るゝものは、即ち『失戀の涙』らしく思はれる。否或種の文士に至ては――秋香既に衰へ、蟋蟀冷露を嘆ずる、其の悲哀が、最も恐るゝものではあるまいか――はた數莖の白髮、既に紅顏のブライト(光輝)を減じたる、其の老衰が、最も恐るゝものではあるまいか。而して、聲弱はり果てたる蟋蟀の『悲哀』、さては時計の針の弛

て、圓滿なる結果を生じ能はざるは、蓋し常識ある者の、容易に察知し得る事理ではあるまいか。

勿論養子口の向が惡いと言つて、直ちに文士は惡漢なりなどと、速斷する譯には往かぬ。されど僕等を以て之を見るに、男子苟しくも、養子に所望せらるゝ位の、人物にあらずんば、到底事を成し、榮ある生涯を送ることは出來まい。之れ素より僕等の、斷言して憚らざるとである。

別段說明する迄も無いが、總體養子に所望せらるゝ連中は、必らずや、人格から見ても、學業から見ても、はた風采から見ても、拔群の者に相違無いのだ。さりなから、養子に所望せらるゝのと、養子口を望むのとは、素より全く別事である。實に養子に所望せらるゝ人物の、模範的紳士に近きは、之を相察するに難くは無いが。併し幾ら養子に所望せらるゝ人物でも、自から養子口を詮議するやうな考がありては、鬼淚陰士に比し、兄たり弟たりで、矢張り同じ穴の中の貉。識者は斯る男子を、腑甲斐なしと貶するのである。

遮莫、養子の向が惡い文士の境遇、たとへ善智識ならずとも、少しく人心ある者、誰しも同樣、是非に濟度してやりたいものだと、心私かに思はぬはなかろふ。

『文士は何を最も恐るゝか』

一寸考へたところでは、文士の最も恐るゝものは、即ち『失戀の涙』らしく思はれる。否或種の文士に至ては――秋香既に衰へ、蟋蟀冷露を嘆ずる、其の悲哀が、最も恐るゝものではあるまいか――はた數莖の白髮、既に紅顏のブライト(光輝)を減じたる、其の老衰が、最も恐るゝものではあるまいか。而して、聲弱はり果てたる蟋蟀の『悲哀』、さては時計の針の弛

み無く、貴賤醜美を分たず、ひとしく襲ひ來る『老衰』を以て、最も恐るゝものとなす文士の如きは、甚だ感心な連中、兎角文士は、斯ふ言つたやうな、優雅な君子でありたいものの。

ところが、上來說ける文士連、即ち無主義を以て主義となし、幇間的思想の發達せる爲め、往々慾に目の無き行動を敢てするも。而も自尊性極めて高きが故に、動もすれば、他の賢い連中に依りてかつがれ、樹から墜ち、其上泣顏を蜂に刺された滑稽を演じ出すやうな、光榮ある文士に至つては。そが最も恐るゝところのものは、即ち米屋の小僧と、酒屋の御用聞との外は無いのだ。

そも『失戀の涙』を以て、最も恐るゝものとなす如きは、一見甚だ意氣地無しの感、無きにあらずといへども。而も文士として、酒屋、米屋の小僧を、惡魔の如く恐怖するに比すれば、『失戀の涙』を恐怖する連中や、遙かに文士の名に相應はしき輩であらふ。と言つたところで、事實は僕等の癖で、何とも致方は無い。たゞ識者の努力を乞はんが爲め、今此に文士の、酒屋、丼に米屋の小僧を恐怖せる事實を記し、以て同情を催促せしむべく試むることに致そう。

鬼涙陰士、今では九尺二間の裏店に、陰房鬼火靑きやうな、生活を營んで居るのだ。併し其の氣焰と言つたら恐しい。家主の天保爺、一昨日の朝から、實に十一遍足を運ばせ、之で都合十二遍

『先生、佛の顏も三度と申すが、私は之で十二度ですぜ。家に居ながら、多忙で面會出來ぬとは餘りでせう。言ふも野暮ですが、敷金一兩入れたでなし、月に二圓半の家賃、今月で三個月、未だに只の五十錢、收めて下さらぬとは、酷いじやありませんか』

隱士、鬚もじや〳〵の顏を、破れ窓から、ニウーと突き出し、

『之は家主の御隱居、御足勞の段、恐縮至極に存じます。併し無い袖は振られぬ道理、今少しく待て下さらぬか。一年たつた三十圓、十年で三百圓、百年で三千圓。改めて斷ずるまでもなく三千五千の端錢(はしたがね)で、御迷惑掛くる拙者ではござらぬ。若し御隱居が今明日の中に、墓底に眠らるゝやうなことがあれば、必らず御子息の手に拂ひ申すし、御子息百年の後には、誓て御孫殿の手に渡すです。惟ふに尊臺は、斯んな端錢(したがね)無ければ、米鹽の資に窮する御身分でもありますまい。何事も忍耐が肝要、待てば甘露の何とやら。マア好いです、今暫く辛棒なさるゝが得策でせう』

家主殿、艴然として

『先生、マア好いですとは何事です。あなたは好いか知れぬ、私は甚だ迷惑千萬。何が何でも、今日中には是非御拂ひ下さい』

隱士は、益々平然として

『今日中とは、酷ぢや無いですか。若し拂はんと言へば、どうなさる御考です。イヤ一國の文士を以て任ずる拙者、決して拂はんとは申さぬ。問題はたゞ時間の一點です』

强ゆれば、逃げ出さるゝ恐あり。逃げ出さるれば、三月分は零(ぜろ)。さすがは天保爺。

『ぢや待ちませう。文士と言へば、義理人情も、人百倍御分りな方、多くは申しません、自から、不義無情の人と成るやうな、あなたでもありますまいから……』

眞綿で喉を緊めるやうな捨て言葉で、爺は悠然歸り去つた。

隱士殿、家主に對しては、斯くの如く强硬なる態度に出づるものゝ。酒屋の小僧と、米屋の御用聞とには、長へに頭が上らぬ次第。家主と入り

代つたは、酒屋の小僧、

『先生、御勘定……』

『小僧さん、君は眞に富豪たる人相を有して居るな。英い者だ』

斯ふ煽てた後に

『ところで、甚だ申譯無いが、今月の晦日まで、猶豫して呉れんかの。何しろ昨日、廢兵院に千圓以上の寄附したで……』

『廢兵院に、何萬圓寄附なさらふとも、私の關係したことでありません。どうか御勘定を願ひたいものです』

『そこが君に、斯ふ平身低頭して、依賴するところなんだよ。僕も堂々たる文士、僅か十圓や二十圓で、錙銖の利を爭ふ、商店に迷惑は懸けぬよ。どうか君宜敷賴むぜ』

小僧殿、なか〳〵屈せぬ。

『先生、夫は不可ません。僅か十圓か二十圓だから、お拂なつたらよいでせう。百圓二百圓といふ大金なら、斯んなに毎朝毎晩、催促には參りません。先生と言はるゝ方が、僅かばかりの掛で、酒屋の小僧から苦しめらるゝなんて、評判されては、甚だ不名譽ぢやありませんか』

正々堂々たる議論、隱士も少しく辟易した體。

『併し小僧君閣下。龍も時を得ざれば螻蟻に侮らるゝが常。九尺二間に籠城するに至つた僕の苦境、どうか察して呉れたまへ』

有意か、無意か、其の聲がうるんで居る。惟ふに斯る呼吸を用ゐたら、世情に昏き少女等は、必らず

『まあ、御氣の毒な方だこと。ほんとに才子は薄命だわ』

なぞと、甘つたるい同情を、與ふるに違いあるまい。併し酒屋の小僧殿

は、石佛が苦笑して居るやうな風附

『誰が時計を無くしても、娼妓が笑だらけでも。そんな事、どうでも好いです。先生早く勘定を願ひます』

陰士も策盡きて

『馬鹿め。無い錢が何で拂へるものか。分らん奴ぢや。斯く嘆訴しても納得せんにや、もう拂はんから、そう思へ』

小僧も喧嘩腰。

『どつちが馬鹿だ。先生なんて、髮なんか生して居ながら、酒屋の小僧に頭が上らねへだらふ、馬鹿先生、借金先生。貧乏先生の乞食野郎――巡査を向けるから、そう思へ』

飯は耐えても、酒氣を帶びねば、半日たりとも、生きる心地せぬ鬼涙陰士。素より巡査に說諭さるゝ柱は、馬耳東風に聞き流す底の度量はあるが、酒を得ざるには閉口する、

『今時の小僧は喰へぬものだ……』

どつかり横臥して、吟じ出す詩一篇。

『一年始有一年春　百歲曾無百歲人
能向花前幾回醉、　十千沽酒莫辭貧』

吟じ了らざるに、米屋の御用聞

『今日は……』

陰士

『旅順の陷落も無理は無いな……何だ君、勘定かな。』

『先生、どうか今日は頂戴したいもので』

『實は米も無くなつたで、待てたところだ。晩には拂ふから、直ぐに五圓丈、一等米を持て來てくれ。今夜は間違へんから。』

御用聞、何が可笑しいのか、手拭で口を押へ、くす〳〵笑て居る。

『君、何が可笑しいんだ。犬が交つてでも居るのか』

『先生、今夜は、ほんとですか……今迄此の手を、五度も喰はされましたからネ』

『二度あれば三度ありと言ふが、五度あれば六度ありと言ふ、俚諺は無い筈ぢや。信じて僞かるゝは、謀りて僞く者よりも、遙かに幸福なりと言ふぢや無いか。這般の消息を解さんでは、大商人には成れぬぜ。』

聞きも了らず、

『警察に訴へるより外仕方が無い。少しキ印だな。あの青ん坊』

要するに鬼淚陰士の、最も恐るゝものは、即ち酒屋の小僧と、米屋の御用聞とである。此の夕、酒は一滴も無く、米櫃また空しと來て居る。と言て、近所の米屋も酒屋も、悉く陰士の事情を知て居るので、酒一勺、米一合、よもや貸してくれる店はあるまい。陰士破机を抱きて浩歎する、蓋し已むを得ざる話である。

『社會は何を最も恐るゝか』

酒に渴し、飯に餓えたる鬼淚陰士、窮すれば本に歸ると言ふ譯でもあるまいが。中學時代の講師、今では文部省にありて、相當の地位を占めて居る、某高等官の門を叩いたのである。

取次の女中、シゲ〳〵陰士が、貧相な風體を眺めた上句、

『旦那樣は、只今お留守でございます』

なか〳〵氣轉の善い女中。兎角社會は斯ふしたものであらふ。若し之が二人曳でゞも、驅け込んだのなら、高利貸が催促に來たのとも知ら

ず。

『ハイ、只今御歸館遊ばしました。どうか應接へ』、

無斷に通し、後で散々な目に逢ふは受合。所詮社會に立ち、意味ある處世を致さんとするには、何が何でも服裝には、十二分の注意を拂はざるを得まい。

抑々英の小說家ツロ・トラップの、曾て

『余は主張す、盛裝の紳士とは、何人をも注目せしめざる服裝の人なり』

斯ふ言つたのは、甚だ尤な譯である。實に男子として、人目を眩せしむるやうな、華美な服裝するは、どうしても紳士の盛裝とは思はれぬ。去ながら、古き衣を着けたる時よりも、新らしき衣を着けたる場合に於て、遙か美はしき心地するのは、敢て思想淺薄なる、少婦のみではなからふ。

テニスン卿が

『たゞへいかなる美人なりとも、新しき衣を着けたる時を以て、古き衣を着けたる時よりも、美ならずと思はずあれ』

と言ひたる、之れ洵に、老幼貴賤に通じて、眞に然るべきものではあるまいか。

勿論デグリー(程度)は、萬事に普遍し、そか至善の域を確保せしむる、貴重なる要素で。如何に高價な衣裳も、デグリーを失すれば、何らの美觀を添へざる如く。たとへ新らしく、且つ流行の衣裳が、好いと言つても、地位身分に應せざれば、所謂『過ぎたるは及ばざるに如かず』との意義を、確證せしむるものと成るのみである。

遮莫、人若し鬼涙隱士が、今や舊師の宅に於て、門前拂に逢いたることの、一に全く粗惡な服裝の然らしめたるを知らば、誰れか服裝の、輕視す可

からざるを思はぬ者があらふ。

旦那樣は、只今お留守と言はれた鬼涙陰士、怒氣滿面に溢れ。

『何ぢや、お多福。五分前に車で歸て來た旦那樣が、まさか鼠ぢやあるまいし、流しの孔から、外出する道理も無からふ。二階に往て見い。今頃は屹度、洋服を着換へた時分ぢやから』

主人は溫厚な質。靜かに玄關に出ると、他人ならぬ鬼涙隱士。見るより

『鬼涙か。ハ……女中は、君のこと强請ぢやと言ふたぞ。相變らずの風采ぢやからナ。マア上れ、緩々酒でも飲まう』

女中は再び震へ上つた。

たらふく御馳走に成つた上句に、金の無心。並大體の者なら、怒るべきところだが。溫厚なる質、加ふるに師弟の間柄。よい年して、未だに斯んな態しとるのかと、可憐の情、禁じ得ざるところからして。妻君に命じ

『之は少しですが車代に』

と差し出さしめたは、確か圓助二枚。隱士、押し載いて再來を約して罷り下つた。お多福と罵られた女中、定めし隱士の去た後には、どつさり鹽を撒たであらふ。

詠者は忘れたが

『人はたゞあかれぬ前に遠ざかれ
心の底を名殘にぞして』

と言ふのを記憶して居るが、之は甚だ尤な話で。少しく世情に通じた者は、誰とて其の眞意を納得せぬは無からふ。言ふ迄も無いが、毎日來れば、うるさがり。久し振りには、茶菓子が出る。夫れも一年一度の客

になると、袖引きとめる。十年目には嬉し涙をこぼすが人情の常。兎角人は、珍らしいものが嬉き。若し世に處して宜しきを得やうとするには、服裝を重んずると共に、這般の人情に就て、大に思ふところあり、常に好愛せらるゝ人とならざるを得まい。

惟ふに幸福と言ふも、成功と言ふも、皆な之れ對人的に存するもので、孤樓獨居の人の、企及すべきものでは無いのだ。既に然りとすれば

『また來たのか』

と嫌がられ、逢ても見ぬ振せらるゝやうでは、如何に非凡なる才能を有すといへども、幸福の生涯を送り、成功者の榮名を擔ふなどは、以ての外の難事たるに定てゐる。若し文士が、社會の最も恐るゝものであつたら、文士の境遇の、眞に慘憺、見るに忍びざるものであることは、誰とて察するに難しとせぬであらふ。之れ特り鬼涙隱士のみを見て、輕々に斷言するのでは無い。實に社會の最も恐るゝものは、幾ら考えなほしても、どうも文士であるらしく思はれる。

然らば何故社會は、爾く文士を恐怖するのであらふ――社會の事情に委しい待合の女將、曾て文士に就き、斯んな皮肉な批評を下したことがあつた。

『文士さんほど横着な者はありません。男でも善いならまだいしもですが、イケ好かない面して、揃も揃て藝者達から、遊ばせて貰ふなんて考へてますからね』

其の當否は、敢て此に之を定むる限りで無いが。火無き處に煙上らざる如く、斯る惡評を浴せかけらるゝ文士、少しく反省した方がよろしくはあるまいか。

『文士の理想』

文士の側面觀は、甚だ趣味無きものにして了つた。僕素より文士ではないが、矢張筆を執て居る以上、文士の『ハトコ』位には相當するであらふ。既に文士の『ハトコ』たる身を以て、或は文士は幇間者流などと言つたり。向きの惡き養子候補者なりと罵つたり。文士は酒屋と米屋との小僧を恐怖すると呼ばはつたり。さては、社會の最も恐るゝものは、即ち文士なりと斷言す。之れ洵に情に於て、甚だ忍びざるものあるは、言ふまでも無からふ。併し彼れ商君は

『苦言は藥なり、甘言は疾なり』

と言ひ、東平王は、苦言至戒、之を望む渴するが如しともあれば。僕の如き苦言は、必らずや親愛なる文士諸君を益する、甚大なるものある可きを思ひ、そこで斯くは、遠慮無しに所思を披瀝した次第である。

今や章を結ふに際し、一言文士の理想に就き、費して見たいと思ふのだ。勿論、人類終局の目的は、『多幸多福の生涯』に在り。之は商人も、農夫も、軍人も同一。また文士といへども、そが終局の目的は、即ち他なし『多幸多福の生涯』で。其の理想といふ、蓋し多幸多福の生涯を送る範圍を出でやう道理は無い。併し文士に限て、一寸毛色の變つた理想を懷て居るのだ。

『絶世の美人に傅かれ、赫々たる文名を宇内に轟かし、原稿料を念頭に止めざる程度に於て、貧しき生活を營みたい』

之は確かに一寸毛色が變つて居る。文士は原稿料で衣食すべき者、而るに『原稿料を念頭に止めぬ程度』と來ては、いさゝか面倒な言ひ廻しである。加ふるに『貧しき生活を營みたい』と言ふのだ、愈々出でて益々妙。

併し此の邊が、文士の文士らしい言かも知れぬ。夫れから赫々たる文名を宇内に轟かすも、絶世の美人に傳かるゝも、特り文士に限つた理想では無いけれども、名譽を欲し、美人を好む人情が、殊に文士に於て、甚だ切なるものあるを認むるのだ。

現に文士は、妻を迎ふるに躊躇すること甚だしい。と言て、結婚は人事の大禮なるが故に、爾く躊躇靜慮するのでは無い。僕私かに察するところ、之れ洵に

『一度結婚の披露すれば、取替ゆるのが面倒である』

といふ、頗る實際的考案に基いたものだ。併し其躊躇靜慮の期間に於て、實に幾多の女子を拉し來たり、以て實地の檢閲を行ふか、分つたものでは無い。斯くの如くにして、愈々結婚の式を擧げたところで、間も無く、一葉落ちて天地の秋を知るの時期を來たし、幾度と無く、悲慘なる破鏡の悲劇を演出するのだ。この事實を見たら

『成る程文士は、絶世の美人に傳かれんとする、熱誠なる理想を懷て居るワイ』

と察知し得ざる者は無からふ。實に文士の美人を娶らんとする理想は、常人に比し餘程異彩を放て居る。

併し名譽の方は、左程ではないらしい。若し美人に傳かるゝに至れば、名譽などは、何うでもよい底の悟道を得。筆に由りて文名を得るよりは、美人を携へ、之れ見よかしの閑歩。よりて以て道路の人の目を、欲たしむる方が、即ち文士最上の、名譽ならずやの趣がある。

最後に一言するが――曾てキーヂス、ネスビット、文士に警告するに

『書けよ、書けよ、書けよ。出せよ、出せよ。賣らんが爲めに書け。効用を思て書く可からず』

斯の言を以てしたが、ネスビット先生、なか〳〵聰明にましますと申しあげてよからふ。

第四章　政客の側面觀

『三つ兒の魂百迄』

『三つ兒の魂百迄』の俚諺にして、果して眞ならば、年少、青竹を腰にし、自から將と成つて、近隣の兒童を統御したる餓鬼大將は、長じて猶ほ少しは、餓鬼大將の俤を留むるが、當然の事理ではあるまいか。性善を主張した孟子が、大人を以て、小兒の心を失はざる者なりと說破したる如きは、今此に改めて之を言はずもあれ。吾人を以て之を見るに、長じて苟くも商人たり、文士たる特性を備へて居る者は、其の少時に於て、既に早く商人たり、文士たる特性を流露せるが如く思はるゝのだ。

勿論、奇を盡せる人生、時に或は人をして

『あの人が軍人に成つたとは、驚きますね』

と、嘆せしむる場合も少なくは無い。併し一般の上から立言するに於ては、吾人は遂に『三つ兒の魂百迄』の俚諺の、眞に然るを是認し、農夫も、政客も、既に幼時に於て、農夫たり、政客たる特種の色彩を放つを、斷言して憚からぬのである。

去りながら、世の淺薄なる觀察者は、僕等の斯る言明に對し、必らず

『妄言も程があるではないか。若し幼時に於て、爾く將來を卜知し得るなら。何で社會は、斯くの如く失敗者に滿ち、朝々暮々、斯くばかり悲慘なる嘆聲を聞かふに。』

斯んな非難の矢を放つであらふ。併し退て之を惟ふに、眞目面切つて斯んな非難を與へるところが、即ち『淺薄なる觀察者』と申すべき根據で。世俗に所謂一を知て、二を知らずとは、實に斯る連中に對する至當の評語であるのだ。僕等は繰り返して斷言するが――人、七十歳にして、猶ほ明らかに七歳當時の俤を留むるが如く、七十歳に於ける社會上の地位は、七歳當時、既に幼稚園に於て、早くも略々之を察知し得ることが出來る。

然りといへども、手當り次第幼兒を捕へて、そが將來を卜知する如きは、之れ洵に非凡なる識者の事で。かの闇にはあらねど、子を思ふ故に迷へる父母の眼、即はち我が兒の兎唇は、曆に見ゆる底の、常人の眼を以てしては、到底、斯る事が出來得べくはあらぬ。要するに一般の常人にありては、啻に幼兒を見て、そが將來を卜知するが如き難事のみならず。察するところ、豫想外なる贈物を見て、そが裏面に伏在せる、重大なる依賴をだに、推測し能はざるは、甚だ明瞭の事理である。されは事を議する者は、必らずや、其の身を事の外に置き、以て利害の情を悉さねばなるまい。

而して斯る賢明なる父母は、世上極めて稀れなりとすれば、古來『子を知るは親に如かず』の諺が、存在せるにも拘らず、悲しむ可し

『子を知らざるは親に如かず』

てふ、惡評すら生ずるもの、また其の所以なしと謂ふことは出來まい。

遮莫、世の父兄にして、冷頭以て靜觀、子弟の將來を察知するの時、豈に朧氣ながらも、之をトし得ざるの理があらふや。僕等は再び此に繰り返して斷言するが、實に人の長所は、六歳、七歳にして既に早く、少しく發露すべきもの。されば人若し幼時より、斯の長所を修養し、長じて十分に其の長所を發揮し得べき地位に立つを得ば、人生之に比すべき幸福はなからふ。而して成功の柱冠は、常に斯る人によりてのみ得らるゝのだ。

然れども幼時に於て、既にそが長所を發見し、修養宜しきを得、萬難屈せず、萬苦弛まず、專心一意、遂にそが長所を發揮するに足る、地位を獲得すべく努力するが如きは、眞に至難の事に屬し。古來今日、斯る男女は、洵に百萬人中、猶ほ一人をすら數へ難きのである。之れ或は微妙なる天意、換言すれば意地惡き造化てふ、驕兒の惡戲かも知れぬけれど。若し世の父兄たり、敎師たる者にして、『三ッ兒の魂百迄』の俚諺を記臆し、『虎は生れて既に千里の氣あり』てふ古語を忘却せず、努めて、子弟の長所、婚好等に就き精察するところあらば、近くは斯くの如く、失敗者を出さぬことが出來はしまいか。

然るに世の父兄、並に敎師の殆んど總ては、啻に子弟の長所を識別しやうなぞの念を有せざるのみか。實に子弟の長所も思はず、嗜好も顧みず、偏へに『第二の我』たらしめやうと苦心しつゝあるのだ。そも〳〵利我的行爲の種類は、素より百、二百にして足りまいけれど、世の父兄、並に

教師等が、子弟をして『第二の我』たらしめんとするが如き、蓋し利我的行爲の中にありて、最も慨嘆すべきものではあるまいか。

實に斯る利我的父兄の下に養はれ、はた斯る教育家の下に教えられ、爲めに古來幾百千の英俊か、空しく土中に埋殁したであらふ。若し夫れ偉人の傳記を繙くに當り、讀者をして切なる感慨を催さしむるものは、洵に彼等の、頑愚なる父兄、昏迷なる教師によりて抑壓せられつゝある、闇黑なるページでは無いか。

『何故に人は如斯失敗するか』

勿論多少の除外例はあるにしろ、『三ッ兒の魂百まで』の俚諺は、長へに眞理の光明を確保して居る。去りながら習慣の勢力は、實に偉大なるもので、ウエリントン侯の

『習慣は天性に十倍す』

と絶叫したる、また之れ、決して激餘に發したる、一片の忘語とのみ貶す譯には往くまい。

そもく溫順なる仔羊も、猛惡なる狼群に棲めば、心自から猛惡に化するは、吾人の往々目擊する事實で。即ち其人の日常生活が、一の習慣を構成し、其の習慣や、自他共に識らず知られざる間、何時しか、第二の天性を作り。既に第二の天性たるに至るや、平素最も能く彼を知れる者は、恰かも魔術の實驗にても見たるが如く、愕然として

『彼は一變せり』

と活嘆するのである。而して此の活嘆は、やがて其人をして

『人の性質は分らぬものなり』

と感嘆せしめ。たとへ『三ッ兒の魂百まで』の俚諺は、長へに其の眞に然

る所以のものを保持するといへども、而も斯る『習慣は第二の天性を作る』てふ事實を見聞したる者は、直ちに此の俚諺の虛妄なるを確信し。主張し。今若し知人の兒童にして、粗野昏愚なるあらんか、即ち

『人の性質は、幾度變ずるか分つたものにあらず、今に必らず變化するに至らん』

斯くの如くに言ふのだ。また己が子弟にして、たとへ技術上の才能、洵に非凡なるものあるも、若し己れにして技術を厭ふこと甚だしく、從て子弟をして如何かして、大文學者たらしめんとするあらば、實に彼は心に堅く

『人の性は、如何やうにも變化するものなり。技術上斯くばかり非凡なる才能を有するものだとへ今は文學上の趣味皆無なるも、安くんぞ大文學者たらしめ得ざるの理あらんや』

と思ひ。要するに、『人の長所の固有なるは、其の顏面の異なれるが如し』てふ、着實なる古語の存在をも忘却し。人は、境遇若くは教育によりて、如何とも成る可きものなりと信じ。且つ一事に卓越する者は、何事に拘らず、必らずや卓越するを得可しと、思惟するのである。

然れども、少しく人生の機微を察知するの人は、斯る無稽なる思想を有せらるゝ筈は無い。たゞ夫れ社會の實情に通せず、人事の眞相を念とせざる、平凡なる男女にありては、實に斯る無稽なる思想を懷き、以て自己を處し、併せて子弟を育成しつゝあるのだ。惟ふに人として、赫々たる成功を欲せざる無く、多幸多福の生涯を送らんことを、期待せざる無きに拘らず。人生到るところ、失敗者の嗟嘆を耳にし、社會は恰も之れ、憂苦悲哀場裡にして、人は泣く可く、恨む可く、憤る可く、悲しむ可く生れ來たりしやの觀を呈ずるもの。皆之れ、斯る頑迷愚鈍者の、無稽なる思

想の結果と謂はざるを得まい。

そも〳〵運命の開發は、眞に至難の事に屬し、實に人力を以て、如何とも成し得ざる思ひすらあるのだ。而も人若し『三つ兒の魂百まで』の俚諺を信じ、且つ『愚者といへども、必らず一長あり』の金言を察し。少さか御幣を擔ぐやふだが、併せて『神は無意味に人を生せしめず』てふ、至大至高の確信を有し。譬へば之を自己に就て言はんか、即ち

『我れは、何事をか成す可く、生を人生に受けたのだ。既に然らば、天性愚なりといへども、何か一長あるは理の當然。若し日に月に此の長所を育成し、以て此の長所によりて社會に立たば、安くんぞ分相應な成功を致し得ざる理があらふや』

斯くの如く思ひ、自愛自重、よく大器晩成を期すれば、眞に光榮ある生涯を送ることが出來やふ。また子弟に就て之れを言へば、即ち

『彼が如き平凡者といへども、一長を有せざるの理は無い筈だ。察するところ、何ら長所の未だ顯然たらざるは、時機の到來せざるが爲めか、若しくは、人之を識別するの明を有せざるの故であらふ』

斯くて、所謂舜も人なり、吾も亦た人なりてふ、一大信念の下に、よく百年の長計を撫育せしめ、遂に意味ある生活を營ましむることも出來やふ。要するに自信自重の念は、處世の最大要素にして、特りジョンソン及びハーセルのみにあらず、エマーソンにまれ、孟子にまれ、新井白石にまれ、將軍家康にまれ、古來苟くも『偉人』てふ、英名を萬載に留めたるものは、たとい少なくとも『人生を解したる者』として、記錄に其の名を殘し得たるもの、誰れか自信自重の念を以て、成功の根底、處世の要素とせざる者があつたであらふ。

文豪として知られたるサミウル、ジョンソンは『自信』を嘆稱し

『自信は、大業を成す唯一の要素なり』

と斷言し。また天文學者として聞えたる、ジョン、ハーセルは『自重』を嘆美し

『自重はあらゆる道德の基礎なり』

と喝破して居る。實に人若し傳記書を繙くの時、各種の偉人烈士に通じ、旺盛なる自信自重の念ありしは、蓋し、最も容易に察知し得る事實であらふ。僕等不佞といへども猶ほ

『自信自重の念ありて、時に成功し得ざる者あるも、未だ曾て之無くして、失敗せざるものあるを知らず』

實に斯くの如く斷言して憚からぬのである。然り而して自信自重の念の、よりて以て生ずる所以の根源は、實に

『天は無意味に人を生せず』

と言い

『愚者といへども必らず一長あり』

と言ふが如き、『平易單純なる自覺』である。然ば即ち若し世の父兄たり、教師たる者、如何にせば子弟をして、自信自重の念を養はしむべきかを思はゝ、斯の種の『平易單純なる自覺』の根底を成すかの

『三つ兒の魂百まで』

の俚諺を念頭に止め。以て、春雨一來、まさに發芽せんとする地中の種子の、そが特質を判じ、併せてそが將來を判じ、以て子弟をして、自から自信自重の念を、確保せしむべきではあるまいか。若し夫れ人ありて——何故に人は、如斯失敗するかと問ふあらば、吾人は一考するを要せず、直ちに

『世の父兄たり、教師たる者、頑迷昏愚にして、子弟の長所を識別し能はざるの罪に坐す』

と答ふるのだ。而して斯く答ふるを以て、最も適切なる返答と信ずるのである。

『半白の餓鬼大將』

寺子屋を、少しく改良したやうな村の小學校。校長先生は、推察通り、勿論壇那寺の和尚さんで、當年五十幾歳。瀛車は申す迄も無く、瀛船をすら見たこと無いと謂ふ聖人。曾て集會のあつた時、英吉利と言ふ國は、天竺の南に當り、水が悉く黃色を呈じて居る、そこで此水を飲む英吉利人の頭髮は、當然黃色を呈する理屈さと言て。村の物識は、和尚さんで、あるとの譽を擔ふた、烏無き里の蝙蝠博士。斯る校長を上に戴ける教員の眞價は、察するに餘りありと謂つ可きだらふ。

上は、村長さんの獨息子より、下は、村の出口に、露店を張つて居る、チョンガの次男に至るまで、總計八十五人。其の中で善かれ惡かれ、評判の生徒は三人ある。

一人は、和尚殿の貰子。之れは賢いといふので評番高く。孔子聖人も、幼時には屹度斯んな人物であつたらふとは、實に校長和尚殿自身の感嘆。

今一人は、氏神樣の神主の御令孃。芳紀まさに十四歳、肉附の善い、活々した顏立ち。少し赤らつ面の方だが、眼がパッチリして、夫れに何處やら、言ふに言はれぬ愛嬌あり。加ふるに生母が、京都生れと言ふだけあつて、近在には見ることの出來ぬ衣裳持。村で『孃樣』と申せば、誰しも『神主さんとこんだらふ』と早合點する位。

次に評判なのは、獵師の一男。年よりは身丈が伸び、育が育なので、言語動作、成る程獵師の腕白太郎としか受け取れぬ。併し太郎、なか〳〵の變物である。

『校長だつて、何が怖いんだ。墓の番人ぢやないか。

巡査が何で恐しいんだ、此の間、家の爺から、劍突喰されたぢやないか。

佛樣や神樣は、人形と異が無いや。家の『斑』、何時でも地藏樣に小便かけるぞ。

金持が、何處が英いんだ。泥捧が怖くつて、年から年中心配しとるぢや無いか』

之れが腕白太郎の人生觀。惟ふに彼が斯る人生觀を懷くに至つたのは、必らずや、母無く、兄弟無く、十年以來、男親の手一つに育つた爲めではあるまいか。何しろ、箸にも捧にも懸らぬ餓鬼大將。されど學問が能く出來るのと、今一つは、其の惡戲が、何處やら可愛いところがあるので、腕白の割合に、人から惡まれず。世情に長じた、最下級担任の婆樣先生曾て

『あの兒は、無邪氣で、面白い』

と評したことがあつたが。之は蓋し彼に取りて、知人の言と謂ふても差支は無からふ。

村校での一名物であつた腕白太郎、十七歳で父と別れ。其の翌春、袖ふく風の寒からぬ櫻花好時の節、江山百有幾十里、瓢然東都に上つたのであつた。新橋に着くや否、改札口の側らで放尿し、爲めに三日間警察に拘留せられたが。人事は妙なもの、之が却て、知らぬ地獄で知己を得る媒と成り、遂に署長殿の家に、食客たること約十五年。

男は三十が花盛り。之と言た學歴は無いが、膽斗の如き彼が風采、なか〳〵立派なもの。一日署長殿の奥樣が雜話の余

『きちんと禮服でも着けさせたら、ほんとに秘書官位には見えますワネ』

斯く言つたのも、決して無理は無い話だ。ところが、之をまた聞きした腕白太郎

『失敬極まる言ぢや。乃公を以て秘書官に比するとは怪からん。少なくとも乃公は、大臣の材ぢや』

何處までも腕白太郎である。

三十にして娶らず、四十にして家を成さず、浪々たる食客の生活を送る、茲に二十幾年。然れども語に謂へる『龍は長へに地中のものにあらず』とは、斯くの如きを言つたものであらふ。四十二歳にして、遂に押されて代議士と成り、一躍政界にありて、一方の鎭たるに至つた。餓鬼大將の腕白太郎、今では半白の壯夫、而も餓鬼大將たる特質は、舊に依りて存在して居る。三ッ兒の魂百までとは、古人なか〳〵甘いことを言つたもの。

選擧區は、無論彼が鄕里。彼や實に或意味に於ては、確かに、錦を着て故鄕に歸つたのだ。而も事實は大違ひ。綿衣六尺の大男、之が代議士の候補者とは、當時誰の目にも映じなんだに違い無い。併し高潔なる人格は、自から眉間に現はれ、膝談半時、人は必らず一種言ふ可からざる、彼がチャームに魅せられざるを得ぬ。實に一たび彼と語り、

『英い人だ』

と、心底から嘆美せぬ者は無いのだ。殊に演壇に立てる彼は、宛如、神あり て彼を援護せるものゝ如く、若くは魔術を用ふる者の如く、聽者は自

黨たると、他黨たると、敵たると、友たるとを問はず、悉く彼が舌鋒に屈服せしめられ、恍として自失し、覺えず識らず、拍手、以て彼が主張に贊意を表せぬ者は無い。

惟ふに我が國、立憲政治を採用したる以來、彼の如き好代議士は、未だ嘗て無かつたと斷言しても差支はあるまい。かゝる彼がライフを、詳細に說述したなら、『事實は往々小說にまさる』の諺に洩れず、極めて趣味あるに違い無いが、斯る問題外の勞は、眞に煩に忍びぬ心地がする。今若したゞ一言、彼の今日ある所以のものを語らば、

『自己の長所を育成し、理想を實現するに忠實な者であつた』

と言ふにして、十分であらう。

實に彼や、小學時代に於て、既に早く凡庸者流を拔く、數等の高きにあつた。されど、苟しく自己の長所を育成し、そが理想を實現するに忠實なるにあらずんば、如何かしてよく、今日あるを得たであらう。敢て問はん、何を以て、理想を實現するに忠實なる者と謂ふか——三十にして娶らず、四十にして家を成さず、粗衣粗食、食客の地位に安んじ得る。斯の如きは、一見極めて容易なる事に似たれど、而も到底凡庸者流の能くし得るところでは無い。此の一事、如何に彼が、理想の實現に忠實であつたかを、證せしむるに餘りあるだらふ。

彼は常に謂ふ

『余の今日あるは、餓鬼大將當時の自己(セルフ)を、保存し得たからだ』

と。然り、實に、彼は半白の餓鬼大將。毒舌を以て聞えたる議員某、曾て彼を評して

『彼は半白の餓鬼大將だ。彼に敵すれば、虐(ギヤク)めらるゝばかりである』

と嘆じたのは、是亦、彼を知れる者の言と謂つてよからう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

こは政客の側面觀に、甚だ緣遠い記事。されど政客は、所謂『檜舞臺の華形役者』。『如何にして政客たるべきか』など謂つたやうな問題は、之を人生の上より見ると、なか〳〵以て輕々に附し去ることは出來ぬ。而て以上說くところ、特り政客のみには限らぬが、側面觀察者とはいへども、此位な成功談は、何でも無いと謂ふ、いさゝか高慢の鼻を搖かして、本章の眞先に揭げたのである。

『町内の名物男』

町内の名物男『正宗の龜』、本姓も本名も、之を呼ぶ者は無い。やつと昨日今日、はじめて二錢銅貨よりは、白銅の方が、よいと謂ふことの分つた子供迄が、『正宗の龜』のおぢさんと稱へ、町内で、誰あつて龜さんを知らぬ者は無いのだ。若し喧嘩でもあらふなら、龜さん早速飛び込んで、

『正宗の龜だ、どんな譯かは知らぬけれど、マア此の龜に預けてください。双方の顏が、立たぬやうなことは致しません』

斯ふ仲裁の勞を取るのである。たとへ龜さんの名を知らぬ他人でも、何となく男らしい、夫れに愛嬌ある彼が容貌を見ては、

『貴樣の知つた場合ぢやない』

なぞと、一言の下に叱り飛ばす譯にはゆかぬ。兎に角龜さんは、何處から何處まで、町内の名物男と呼ばるゝだけの、價値は十分に有して居るのだ。

この龜さん、無論、學問は無く、宗教など言つた信仰も無ければ、また迷信家でも無い。一體斯る俠氣を有しとる連中は、火の如き信仰を持つて

居り、いざと言ふ場合には

『命は安いもの、神樣に進上するんだ』

とでも言つたやうな。若し之を難かしく言へば、即ち身を犧牲に供し、以て平素信奉せる神佛の恩寵に浴せんとする底の精神があるものだに。この龜さんは、一向斯る信仰を有して居らぬ。去りながら、龜さん、何と言へば

『之はおれの見識だ』

と叫び、或は

『貴樣達と違て、正宗の龜には、ちやんと見識があるぞ』

と呼ばはるのが常である。併し龜さん、『見識』とは何のことやら、さつぱり御存じ無く。曾て區長さんが、何かの祝賀會席場で

『龜さん、あなたは動もすると、見識々々とおつしやるが、一體見識とは何を言ふんですね』

斯ふ問を發したことがあつた。すると龜さん、相變らず、にこ〳〵者

『區長さん、夫れは、わしのお聞き申したいんで……實は、無學文盲の悲しさ、見識の見の字も知りませんよ。併しぶち開けて言へば、自分では、見識つていものは、多分こんなもんだらふ位、分つて居ますが。さて人樣から、何を見識と言ふんだと聞かれちやあ、さつぱりお答することが出來ません』

惟ふに、斯くの如き應答は、蓋し龜さんの龜さんらしきところで。博學多識の紳士淑女の言とは、てんで其の趣を異にして居る。

そも〳〵龜さんが、見識の語を口にし始めたのは、實に今を距る八年の過去、忘れもせぬ、恰かも滿期除隊の夕である。いよ〳〵除隊する其の朝、平素龜さんの、眞に男らしい氣象に、惚れ込んで居た大隊長殿、わざわ

ざ龜さんを別室に招き、強く龜さんの手を握り、斯く訓誡したのであつた。

『男は男らしい見識なくてはならん。幾ら贅澤しても、自分一人のこと。夫よりは、自分一人の身體を無いものにして、多くの人の爲めに努めるのは、いかにも男らしい見識ぢやの。また之が忠君愛國の道にも適つとる人ぢや』

爾來龜さん、恩威兩つながら備つた、大隊長殿を忘れぬと共に、如何にせば、一身を犧牲に供し、以て萬民の幸福を增進し得べきかをも忘れぬのだ。仁義の何ものたるやを知らず、博愛の道を解せず、勿論倫理道德の文字をすら、見たことの無い龜さん、たゞ一つ、大隊長殿の『男は男らしい見識なくてはならん』の一言を、深く念頭に刻んで居るが故に、僅かに八年、斯くの如く町内での名物男となり。龜さんの顏さへ出せば、どんな難問題でも、いとゞ容易に落着するといふ始末。

龜さん職業は煮豆屋、

『龜さんの豆は味が好い』

と言ふので、なか〳〵商賣繁昌。三十の暮、妻を迎へ、今、花のやうな娘、當年五歲になつた。

『犬よりも劣れる政治家』

町内の名物男、煮豆屋の主（あるじ）。たゞ龜さんで分る筈なのに、なぜ自他共に、『正宗の龜』と呼ぶか。――察するに田伍作君が『田吾作博士』と呼ばれ、若しくは『田伍作男』と呼ばれて見たいと同じく。彼亦『正宗の龜』と稱せらるゝの、單に『龜さん』と稱せらるゝよりも、遙かに光榮ありと思惟しつゝあるのであらふか。

這般の消息たる、素より僕等には明解せぬ。されど、町内での物知り、藥屋の爺樣の言ふところによれば。どんな難事でも、龜さんさへ口を開けば、快刀を振て亂麻を斷つの觀あるが故に。拔けば玉散る秋水に緣み、正宗の文字を冠したとのこと。惟ふに、龜さんの身に取ては、單に龜さんと呼ばれても、何等の差異はあるまいけれど。而も『正宗の龜』と言ふの、何となく男らしくも聞へ、且つ之を言ふに、甚だ口調がよい爲め、斯くは自他共に正宗の龜と稱するに至つたのであらふ。

當區より打て出でん準備の破戸屋代議士。欲に目の無いところよりして、十年苦樂を友にし來たつた政友と袂を分ち。決然時の政府黨に籍を移したのであつた。

一寸考へたところでは、社會は盲者ばかり、利のあるところに就くは、腐肉に集ふ蒼蠅其のまゝ。而して自他共に、別段之を以て異とせぬやうだが、併し實際は案外なもの。殊に多少其の名を知られて居る政客などが、斯くの如く節を變ずる場合には、殊に激烈なる反抗を合ふるが常習である。現に破戸屋代議士の窮狀と言つたら、眞にお話にならぬのだ。

聞くところによると、決然政府黨に轉ずるに至つた、其の根底には、大臣の椅子を占むべき約束が、冥々の裡に成立して居つたものゝ。何分にも輿論が喧しいので、まさか斯の變節漢に、國務大臣の椅子を與ふる譯にも往かず。遂に其の暗約は、そのまゝ暗中に埋められたのであるとか。何しろ總選擧が、眼前に控へて居るので、其の煩悶さ加減は、到底筆には表はされぬ。世俗に所謂『泣顏に蜂』とは、蓋し斯る苦境に淪める者

の謂であらふ。

破戸屋代議士、苦心慘憺の末、一日態々車を馳て『正宗の龜』を訪れ、平身低頭、以て一投足の勞を與へられんことを、懇願したのであつた。

此時龜さんの質問が面白い。

『壇那樣のやうな御立派なお方が、この煮豆屋風情の男へ、そう腰を屈めてのお賴み。悅んで承知致したいところでございますが。其前に承りたいのは、一體どうしたんで、そう世の中の人達は、壇那樣を惡くむんでせう』

さすがは策士、其の返答は巧みである。

『實は、時の內閣が、大臣にしてやると言ふんで、わしを政府黨へ引き込んだのが。世の中の奴等は、わしの成功を羨む餘り、流言蜚語を以て、わしを苦しむるといふ次第さ。どうか事情を察して、何分の御援助を願いたいもの』

『左樣ですか、それは御氣の毒樣です、併しわしらには一向分りませんが、一體議員といふのは、大臣に成るとか、知事さんに成るとか言て騷ぐのが、藝なんでせうかネ。何とか、今少し見識が欲しいものゝやう思はれますが、如何でせう』

見識――破戸屋代議士は、龜さんの所謂見識が何ものを意味して居るか、勿論知らふ筈は無い。併し『代議士の見識』若くは『政客の見識』といふが如きは、如何に變節漢として、社會に蛇蝎視せられつゝある氏といへども、滿更、之を存せぬ道理は無からふ。されど、たとへ見識の意義は、之を解し得るにしろ、吾人を以て之を見るに、彼には到底、其見識を標榜して、社會に立ち得べくは思はれぬ。念頭、私產、私權の外、更に國家無く、同胞あらざる、利己一遍の腐れ代議士。何で龜さんの赤誠に觸れ、彼

を憾動せしめ得るの、見識を表白することが出來やう。

斯く聞た破戸屋代議士、大に赤面したが。さすがは變節漢だけあつて、即座の辨解は妙だ。

『政客の見識とか、代議士の人格などと、仰山に申すものゝ。なかゝ實際に於て、見識を重んじ、人格を高ふすることが出來たものではありません。且つ、社會の發達を計るといふも、はた富國强兵の道を講ずるといふも、要するに、自己の權力を得たる後のことで、若し然らずして、口の先ばかり、彼是申すのは、夫れは甚だ容易な事ではありますが、言はゞ口頭の禪。何も成りあしませんん』。

聞き了るや、龜さん、艶然として

『そんな見識のない方には、たとへ水一杯でも差し上げる譯には往きません。憚ながら正宗の龜、ちやんと見識があります。壇那だつて御存じだらふが、飼犬を御覽なさい。自分の安全を考へて、其上で主人の家を守るなんて、そすな鈍間な眞似はしませんせ。始めて知つたが、代議士なんていふものは、犬よりか餘程劣つてますナ』。

好諷骨を刺すとは、蓋し斯う言つた類であらふ。

『神聖なる議事堂』

正宗の龜さんによりて、爾く見識無きものは、犬よりも劣等なる動物なりと、貶されたる破戸屋代議士。素より僕等といへども、神聖なる議事堂が、斯る無見識なる代議士によりてのみ、滿されてありとは、斷言し能はぬけれど。賢明なる新聞記者諸君の、報導するところに依れば、何だ

か代議士といふ者は、殆んど總てが、斯る無見識なる人ばかりの如く思惟せらるゝのだ。而して代議士といへば、何だか其の範圍が、狹隘なる思するが、實に政客は、皆な之れ犬よりも劣れる者のみではあるまいか。

一休禪師、なか〳〵甘いこと言つて居る。

『名に迷ふ人の心の愚かさよ、
喰て知りたまへお萩、牡丹餅』。

成る程左樣。世上如何に多くの男女が、善美なる名稱に迷ふて、醜惡なる實質を無視して居るであらふ。實にお萩と言へば、何にか奥床しき心地せられ、牡丹餅と言ふと、何だか俗臭ある如き、思ひをなす一般人は、皆な之れ一休の所謂名に迷ふ愚人。蓋し度し難き代物である。

無論僕等といへども、或る程度までは、美名を尊重するに躊躇はせぬ。併し內質の如何を問はず、偏へに名稱をのみ尊重するに於ては、啻に同意を仄めかし得ざるばかりか、全然反對の意をすら、表彰せざるを得ぬのだ。試に之を說かんに――或は、博士と言ふので、さも大學者らしく輕信し、高き報酬を以て雇入れ、程なくその不十分なる實力を知りて、失望せる校主を見。――また或は、世間で富豪と言ふので、其の人の、人と爲りを深くも察せず、大事な一人娘を嫁がしめ、間もなく、夫君は無類な放蕩家、之に加ふるに財產も、聞た十が一も無かりしと知つたが、今更取戻す譯にも往かず、日夜煩悶せる父母を見ば、心ある者、誰か斯る愚人のため、大に嘆息せざるを得やう。

惟ふに斯くの如き事實は、社會に甚た多いのだ。殊に神聖なる議事堂に至つては、吾人其聲を聞くや、如何にも壯嚴清崇、觸るゝ可からず、犯す可からざる思せらるゝに拘らず。さて、實際に立ち入りて見ると、掃溜同樣、洵に鼻を撮まねばならぬ始末。百聞一見に如かずと言つた趙充

國は、眞に處世の金箴を與へてくれた恩人として、長へに感謝せらるゝ權利を有せることが分るだらふ。

改まりて代議政體の定義なぞ、喋々する野暮を眞似るまで無く。議事堂は何をする處で、議員は何の爲めに選出せらるゝか位は、實に小學校上級の生徒は、既に朧氣ながら承知して居るのだ。而るに今若し、一度議院傍聽に出懸けやうものなら、何人の愚者か、其の事實の、餘りに代議政體の精神に齟齬せるを知りて、愕然たらざるを得やう。

誰しも代議士は、『正宗の龜さん』では無いが、頭に政客の見識、即ち國家てふ大きな觀念を有し、如何にせば國利民福を增進し得べきか……と言ふやうな、重大なる問題の爲めに、日夜苦心焦慮し。千思萬考の末に得たところの名案は、之を神聖なる議事堂の、壯嚴なる演壇に立ちて、開陳すべきものと思惟せざるはあるまい。ところが斯くの如きは、てんで、現存せる代議士に向つて、囑望することは出來ぬのだ。僕等をして腹藏なく、所感を披瀝せしむるなら、實に左の如き改革案を、斷言して憚からのである。

『縣知事樣を以て、直ちに代議士たらしめ。警部並に巡査輩を上手に使役し、以て國民の輿論を壓迫し。相談は、總て大臣樣達が兼て通ひ馴れた待合で開くのだ。斯くすれば、一は國民をして選擧の勞を免れしむる、仁君の意に適ふのみならず。一は亦年俸若干を支拂ふにも及ばず。加ふるに、絃歌淺酌の裡に於て協議するのだから、娛樂の點に於ても、議事堂の比では無い』

之は滿更、一片の妄語とのみ視べきものではなからふ。殊に代議士たらんが爲め。粒々皆辛苦、幾代の長日月を費して、やつと賴み上げた資產を蕩盡する、愚人も尠なくは無いのだ。實に社會道德の上より論じ

ても『現代の所謂』議員なぞ謂ふ代物は、有害無益、眞に一日も早く滅失するが、得策に違いあるまい。

『井戸端會議と代議政體』

代議政體は、文明諸國の擧て採用するところ。實に多少世界の事情を聞き囓れる人は、必らずや代議士を選擧するを以て、文明國の特徴であると思惟するであらふ。之は誠に尤な次第で、僕等といへども、いさゝか異論は無いのだ。さりとて眞に代議政體の實を、擧げ能はざるやうな、代議政體では何にも成るまい。喬木あるを以て、古國と謂ふことが出來ぬと同じく、代議政體を採用したればとて、直ちに其國を以て、文明國と稱することは甚だ危險な業である。

殊に僕等は、平素

『生兵法大疵の基』

なる萬歳不易の金言を口にし、はた耳にするでは無いか。代議政體も同じこと、生兵法の類であつたら、其弊果して如何やだ。併し世の辯を好む連中が、知つたがぶりに

『過度時代に於ては、現狀また致し方ないのさ』

なぞと仰せらるゝあれば、御無理御尤も、誠に以て致し方無い次第。そも〳〵代議政體たる、其精神に於ては至善至美。若し夫れ完全に、そが實を擧ぐるの時には、よく理想的國家を實現し得るに定て居る。されど、議員にして、念頭毫も國家とか、社會とか言つたやうな、崇高なる觀念を有せざる限り。如何してかよく、至善至美なる代議政體の實を擧げ得るであらふ。假りに一歩を讓り、現在の如き有害無益の代議政體は、之れ全く過度時代にありて、不已得の事に屬すとするも。而も代議

士たることが、さも光榮ある尊爵でも授けらるゝ如く思惟するは、以ての外の大間違。僕等本來、理屈を語り、議論を闘はすが大嫌ひなれど、さて熟々惟んみれば、なか〳〵默する譯にも往かぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

富豪の令夫人と待合女將。湯屋の三助と大臣の秘書官。此の前後兩者は、何だか似通つた點がある。併し夫れよりも、井戸端會議と代議政體とに至つては、更に遙か、對比の妙を得て居る心持がするのだ。敢て問はん、井戸端會議の驍將と、議事堂の驍將とは、何れか光榮を有すること甚大なるかと。

井戸端會議は、一日二回朝と夕、必らず露路のドン詰りに開かれ。そが饒將として聞えたるは、荒物屋の神さん、お里は確か桂庵で車屋の世話好婆樣の言ふところによれば――この神さん、十六とか七で、大工の內弟子と、手に手を取つて道行と洒落込んだ剛の者。男を見捨てたのか、但しは男に見捨てられたのか。一年たゝずに分れたが、舞ひ戻る譯に往かず。丸二年といふものは、田舍のお茶屋へ酌婦に棲み込み。さらでも悽まじき腕は、數段と悽味を加へ。是迄何十人の男の生肝取つたものやら。どゞのつまり三十五歳で、當荒物屋に押懸嫁と坐り込んだのである。

二回の井戸端會議、傘の必要さへ無ければ、どんな風でも雪でも、遂ぞ一度、この神さんの出席を見ざるは無いのだ。議題は必らず、神さんによりて捏ぜられ。大にしては、國務大臣の艶聞より、俳優の內情。小にしては、向ふ横町の天保爺の足駄は、三年同じ臺である、諸君は如何に鑑定せらるゝやと、言つた工合な問題を始めとし。差配の處に來た今度の女中は、大層白粉の附け方が上手、何の白粉だか御存じなりやと、言ふが

如き議案に至るまで、實に、少なくとも一回三題四題は、必らず議決せらるゝのである。して見ると一箇月平均二百題、一年には、無量二千四百題。さて〳〵豪氣なものである。

會議員は勿論のこと、露路の内外、戸數十二軒。老若男女の別なく、誰あつて此の、至上の權力を有せる、荒物屋の神さんを、光榮ある議長として尊重せざるは無いのだ。類は違ふが、一寸見たところでは、正宗の龜さん同樣。何か面倒な事件でも發生すれば、必ず先づ議長の意見を求むると言ふ有樣。たゞ正宗の龜さんにあつては『見識』を標榜し、朝暮如何にせば、國利民福を增進せしめ得べきかを思ひ、實に献身的精神を以て近隣の幸福安寧を圖りつゝあるが。荒物屋の神さんにあつては、さすが酌婦育ち、惡く申せば虛榮心極めて旺盛。時に往々献身的行爲に及ぶあるも、要するにそは、『斯くて名譽を得やふ』とか『持ち上げられやふ』とか言つた、野心に基いたもので。見識ある龜さんの夫とは、黑白とまでは往くまいが、鼠と白位の差別は、顯然として認め得るのだ。

虛榮心の旺盛なるに從ひ、幾ら女でも神さん、決して

『夫婦喧嘩を治めてやる代り、幾らの手數料を出せ』

なぞ言ふやうな、卑しい風は毫釐も無い。實に是れ迄、親子の爭鬪、夫婦の口論を鎭定したるため、自から幾何の出費を敢てしたであらふ。確か肴屋の若夫婦が、取組合を始めた時の如き、實に圓助三枚張り込んで、平和を回復せしめた筈。

實に此時であつた。鼻毛が馬鹿に長く、何處から見ても鈍間らしい御亭主、斯くと知るや神さんを責めて

『三圓の金を儲けるには、三日や六日ぢや出來つこないや。世話好も程がある』

斯ふ言ると神樣は泰然自若たるもの。其の返答は、甚だ僕等の意を得て居る。

『三圓ほつちの端錢が何さ。人も知る荒物屋の神さん、時と場合には、三圓や五圓は愚か、眞裸に成り、百兩の金だつて拵へなければならぬ身分。人樣の爲めに成ることには、もちつと男らしくするものですよ』

惟ふに、自分の妻より、斯う訓誡せられては、如何なけちん坊でも、グーの音さへ出まい。

斯くの如き議長を有せる井戸端會議、僕等爲めに祝盃を擧げたくなる。改めて申すまでも無いが、井戸端會議と言へば、何となく俗物らしく聞へ。素より議事堂の、壯嚴なる名稱には比すべくは思はれぬ。併し前にも縷述したやう、善美なる名稱に迷ふて、內實の善惡美醜を顧みざるは、紛々たる凡庸愚人の常。實に壯嚴なる議事堂が、走尸行肉の集合で、俗物に聞ゆる井戸端會議が、却りて意氣軒昂、正義の觀念、頗る發達せる議長を有せる、豈に斯の事無しと輕斷する譯に、往くだらふか。

『人心收攬策』

正宗の龜さんにまれ、荒物屋の神さんにまれ、爾く人心を收攬し得たる、惟ふにたしかに一種の英物に相違無い。實に匹夫匹婦にして人心を收攬し得れば、斯くの如く名譽と實權とを有するに足り。君主侯伯にして人心を放散すれば、遂に斷頭臺上の露と化せざるを得ぬのだ。而して人心收攬の妙を得たる者は、實に孟子の所謂『天下の民、皆傾を引て之を望まん。誠に是の如くんば、民之に歸する、なほ水の下に就くが如く、沛然として誰かよく之を禦がん』の類で。人若し人心收攬の術さ

へ得れば、一躍布衣より起りて、大臣宰相たる、蓋し朝飯前の仕事と謂つてもよからふ。

斯く言つたら、讀者諸君は必らず

『他の言によれば、實に人心收攬の策を心得た者は、悉く富貴を擅にすることが出來る譯だ。果して然らば、汝の態は何だ』

なぞと、飛でも無き人身攻擊を加へらるゝでもあらふが。素より僕は毫も富貴の念を有せず、悠々自適を愛する者。何も人心を收攬するの必要を認めざるのだ。一言以て是を蔽へば、即ち僕の大臣たらざるは、『爲ざるなり』で、『能はざるなり』ではござらぬ――天井の鼠、アカンベイして曰く、『烏峰はちと氣が變だ』

前置は是れ丈にして、然らば如何にして人心を收攬すべきか――今此に斯く申さば、代議士たらんと欲する連中などは、必らずやそが欲に縮まつた首を、能ふ限り突き出し、『早く言へよ』『愚圖々々するな』と、大にせき立つることであらふ。併し至言奇ならず、眞理は常に沈腐と相場が定まつて居る。僕の所謂人心收攬策といふも、亦是れ敢て奇異人目を驚かしむる如き、異彩あるものではないのだ。然りといへども、人若し之を拳々服膺するあらば、如何な肥臭き田紳といへども、代議士位は手に隨て得べしである。

そも〳〵英雄の英雄たる所以のものは、一代の人心を吸收し、以て自己の主義を實行するに外ならぬので。さりとて萬古同色の月すら、猶ほ且つ之を望みて、切なる悲感を催す者があれば、また限り無き喜樂を感ずる者もある。眞に十人十色の世の中、一代の人心を悉く收攬し、到る處悉く自己の味方、誰一人己を敵視する者無しといふが如きは、素より一遍の空想に過ぎまい。實に、

『友多き者は、敵を有するまた多し』

とは、蓋し一定不易の眞理であらふ。改言する迄も無く、一代の人心を吸收するといふも、悉く味方となせてふ謂では無い。實に敵には

『恐るべき奴』

として畏怖せられ。味方からは

『一人能く、萬夫に當る』

として尊重せられ、以て百千の難關を過ぎ、遂にそが主義を實行し得れば、是で十分な話。シルラー曰く

『余は果報なるシルラーなり。敵には怨を以て勝ち、友には恩を以て勝てり』

と。惟ふに斯くの如きは、眞に人心收攬の術を解し得たる人の言なりと稱するに餘りあるだらふ。孔明と仲達、謙信と信玄、また之れ好敵手。

而して各々或る意味に於て、確かに一代の人心を收攬したる者と謂て、差支無いのだ。

人心收攬策や、一見、如何にも權謀術策の、所生でゝもある如く思はるゝが、實際は、なか〳〵そうで無い。前聖後聖、皆な人心收攬策を以て、理想的成功策と信じて居るのだ。孔孟は言はずもあれ、アリストートルにまれ、クリストにまれ、そが敎書を達觀すれば、即ち人心收攬策が、いかに彼等に因りて尊重せられてあつたかは、察するに餘りあるだらう。

併し斯る連中の人心收攬策は、代議士たらんとする肥臭き田紳諸君、幷に算盤を離さぬ前垂紳士諸君の、滿足するところのものではあるまい。即ち人格を修養し、以て至善至美の人たり。仁は以て宇內を胸中に收め、義は以て三軍を叱咤して恐れざる底の眞人と成り、此に始めて、人心を收攬し得べしと謂ふが如き。たとへ田紳諸君、並に前垂紳士諸君な

らずといへども、誰として

『斯る迂遠なる收攬策、吾人は耳を傾け難し』

と、頭から冷笑し去るであらう。　實に僕の所謂收攬策とは、即ち斯ふで併し如才無き僕、何の物好きに、斯る迂遠なる收攬策を申上げ、蒼顏瘠身の道德家を氣取り申す可くや。

ある——

『私利私欲を根絶し、以て專心他者の幸福を慮れ』

而して利己的心情は、かのビーチャーの

『他人にありては、萬人の默許せざる罪惡にして、而も萬人の必有するところのものなり』

と言ひしが如く、實に人苟くも聖人の域に達せざる限り、利己的心情を有せざる者無く。　從て『私利私欲を根絶せよ』と云ふ。　或は是れ亦た迂遠なりと、冷笑する人もあるだらうが、併し之は『其の極を』言ひたるもので。　人若し日常、利己的行爲より離脫すべく心懸くれば、たとへ根絶するには至らずとも、我利亡者一流の餓鬼道に陷る恐はないのだ。

而して極力利己的心情を根絶すべく努め、一意專念、他者の幸福を增進すべく努力すると謂ふ。　熟考したら、さして困難なるものではあるまい。　現に正宗の龜さん、及び荒物屋の神さんは、這般の消息を解し、以て斯の人心收攬策を實行したのである。　試に『私產を擲て士を養ふ』とか、『家を破りて國利を圖る』と言つたやうな言を想起したまへ。　何となく心が淸々するであらう。　若し之をクリスト敎主義に言はゞ、即ち健全なる『愛』である。

『社交の要訣』

如上の人心收攬策や、極めて平易單純なるものではあるが、人若し斯の平易單純なる收攬策を實行し得たら、たとへ萬人が萬人、悉く代議士たることは請合はれぬけれど、而も甚だ趣味ある生活を營み得るは、僕等の確信するところである。『仁者憐あり』は、少しく古臭いけれど、事實は長へに事實として認承せざる譯には往かぬ。

かの明の洪自誠の著はした『菜根譚』と云ふは、なか〳〵面白い書物で、處世の道を說く上に於て、甚だ親切を盡して居るやうだ。殊に

『友に交はるには、須らく三分の俠氣を帶ぶ可し』

なぞと來ては、洵に一讀三嘆の價値がある。惟ふに三分の俠氣は、敢て交友の間に於てのみ、必要なるばかりでなく、社交の要訣は、誰が何とおつしやつても『俠氣』の外にはあるまい。

仁義ぢやとか、恩愛ぢやとか、さては人道ぢやとか、そんな七面倒なことは言はず。たゞ一つ『俠氣』の一語、之で社交の要訣は十分である。試に諸君の知人に就て、檢せらるゝがよい。――最も名望ある者、最も羽振のよき者、皆な之れ『俠氣を有する』男女では無いか、實に學識も、資產も、はた美貌も、俠氣の芳香を含有せなかつたら。學識が豐富なれば、豐富なるだけ、益々社交難を感じ、資產に於ても、美貌に於ても、全く其の通りである。

斯く言ふと、或種の皮相觀察者は、口頭泡を飛ばせ、

『俠氣なぞは、現代には無用の長物。實に、豐富なる學識あれば、博士にも成れ、勅選職員にも成れ、はた文部大臣にも成れる。また巨萬の資產を有すれば、社長にも成れ、代議士にも成れ、運好くんば、華族にすら成れるでは無いか。慾に俠氣を擔ぎ出すのは、恰かも自己の肉を殺いで、飢えたる人を助くるの類。人は助から

うが、己は自殺せねばなるまい。其愚や及ぶ可からずとは、蓋し斯ふ言つた連中のことさ』

と、飛んでも無い屁理屈を並べ立てるだらうが。併し斯る妄言に對しては、識者や一顧をも與へぬに定つて居る。

言少しく極端に走る嫌はあるが、若し、自己の肉を殺いで、他を救ふことが出來、而して其の事が、自己の良心を滿足せしめ得るなら、人生斯んな善美なる行動は、甚だ少ないであらふ。現に『身を殺して仁をなす』と、孔子聖人は喝破せられて居る。惟ふに俠氣も、斯る程度に達したなら、夫れこそ人をして、どんなに幸福を感じ、光榮に浴せしむるか知れぬ。去りながら、前の淺薄なる難者の如きは、恐らく斯くの如きを以て、至愚の極なりと嘲笑することであらふ。遮莫人生の美觀は、一に全く、斯る俠氣の流露に待たざるを得ぬのだ。

人若し史を繙き、嘆美して措かざるところは、實に志士烈婦の、大義の爲めに、命を鴻毛の輕きに比し、莞爾として死地に入る、悲慘なるページでは無いか。而して志士烈婦の、斯る秋霜烈日、惰夫を起たしむる底の勳功を奏し得たる、皆な之れ一片天を撼かするに足る『俠氣』の賜ならずして何であらふ。若し夫れ人生より『俠氣』を奪ひ去つたら、人類は忽ちに、食を豺狼と相爭ふに至るに定て居る。僕等は最も大膽に確言するのだ。――人、一片の俠氣を帶びずしては、到底成功を期待することは出來ぬ。

大なる方面より見るに當り、俠氣の價値や、既に斯くの如くなるばかりでなく。其小なる方面、換言すれば日常一般の社交等に於ても、俠氣の價値は、亦た斯くの如く重大である。實に前述したる人心收攬策といふも、詮ずれば『俠氣の流露』の外には出でぬ。而して俠氣の流露に接す

る者や、學者といへども、富豪といへども、權力者といへども、遂におのづから頭を垂れ、心徐ろに魅せらるゝ心地するの、禁じ得ざるものがあるのだ。

然らば如何にして社交の要訣、はた成功の秘條たる、此の俠氣を修養すべきであらふか――チャールス、バークハースト、曾て左の言を成したのであつた。

『眞正なる俠氣は、敬神の中心に生ず』

『敬神の中心』とは、いさゝか耶蘇臭味を含んで居るやうだが。こは他に、或は『義勇奉公の念』と言ひ、或は『博愛仁慈の精神』と言つたやうな言葉と取り換ゆることが出來る。

『最も高尚なる職務』

人心收攬策の基礎を以て、一に全く『俠氣』に在りと謂ふ、若し前來說述せるところに由りて之を解すれば、敢て妄言たるの恐は無からふ。而して人心を收攬することの、最も緊切なるは、實に政治家に在りと謂て差支は無いのだ。今若し

『政治家の成敗は、一に全く人心を收攬し得ると得ざるとに在り』

と斷言する、誰か之を否認する者があるだらふ。

大變理屈ぽく成つて來たが、序に、理想的政治家、即ち吾人は如何なる政治家を以て理想となすか――一言此に費して見たいと思ふ。之を說くに先だち、英のツローワーの言を藉り、人生に於ける最も高尚なる職務に就て、少しく陳ぶることにしやう。

古來政治家に與へたる定義の中にありて、ツローワーの如く、崇高なる文字を成したるは、眞に絕無と言つてもよいのだ。即ち彼は

『あらゆる人生の職務の中に於て、政治家の業務は、最も高尚なるものと謂ふ可し。蓋し政治家は、神の赤子の安寧に、最も密接するが故なり』

と謂つて居る。惟ふに之は甚だ至當な言で。實に人文の發展、國利民福の增進、最も密接に、其の智を役し、はた其の勞を用ゐてもらはねばならぬのは、即ち政治家である。たとへ財貨府庫に滿ち、貔貅全土に普しといへども、政治家の技倆にして、この財貨、この貔貅を善用するに足らねば、いかで、富國强兵の實を擧ぐることが出來るだらふ。

然れども『神の赤子』なぞ言ふと、神經過敏なる者は、

『そんなアーメン臭い寐語は、止にしてくれ』

なぞと、一言の下に罵倒するかも知れぬが。『神の赤子』と言はず『人類』と申したら、何の異存もあるまい。而して人類の安寧幸福に、最も密接するは、ツローワーの言ひしが如く、政治家の外には無いのだ。米屋も、酒屋も、はた毎朝チリン〳〵鈴を鳴らせて來る煮豆屋も、人類の安寧幸福に、密接せざるにはあらぬけれど、到底政治家の比では無い。されど古來、芳名を萬載に止めたる者、其の殆んど總ては、實に、政治に關與せる者のみであつた。楠公といふも、孔明といふも、ビスマークと言ふも、ガーフキールドと言ふも其通り。また古への偉人に於て然るのみならず現代世界各國、最も名聲を博して居るもの、尊位高爵を擔ふて居るもの多くは之れ政治家である。實業家にして、政治に關與せざる限り、常人の所謂光榮ある生涯を送ることは出來ぬ。今若し僕等をして言はしむれば――人生にありて、最上の幸福、至大の成功、一に全く政治家たるによりて、始めて之を期待し得べしと絶叫したくなる。

去りながら、廣く社會の進歩、國家繁榮の上より說かば、文士は文筆を執

つて最も忠實なる文士たるべく。農夫は鋤鍬を執て、同じく最も忠實なる農夫たるべく。其の他教師は、教師として。軍人は、軍人として、各々其の身を立つる方面に於て、夫々忠實なる社會の一員たるべきは。改めて之を語るまでも無い。然れども人位人爵の善美なるものは、誰が何と仰せられても、政治家――たとへ專門の政治家ならずとも、苟くも政治に關係せざる者は、到底之を望む可からずと、斷言しても善い位である。併し斯んなことを言ふと、氣の早い連中は

『馬鹿言ふな、政治家は、名の好い、無賴漢ぢや』

なぞと、殆んど喧嘩腰に、抗議を呈せらるゝでもあらふが、之は思はざるの甚しきもの。若し政治家を以て、斯くの如く言ひ得るとしたら。斯くの如く難せらるゝ、氣の早い連中の某、官衙の判任殿は、實に

『洋服着た乞食ぢや』

と、誹謗せられても、一言半句も出まい。即ち平身低頭、長官の鬚の塵を拂ひ、時には奥樣の下駄迄揃へねばならぬ苦境。若し是等の事を厭ふ時んば、長官の御覺え目出度からず、昇級は言ふ迄も無いこと。或は『老朽任に堪えず』なぞと、首を斷らるゝ始末に立ち至る話。

『人を惡口するよりは、肘垢落せ』

とは、之洵に諸君の遵奉すべき、金科玉條ではあるまいか。要するに、神の赤子の安寧に密接せる、政治家の職務は、實に人生にありて、最も高尚なるもの、ツローワー誓て後人を詐かぬ。

併し社會には、其の名が善くて、其の實は、鼻もちのならぬ代物が、甚だ多きが如く。政治家や、其の意義は、如何に善美でも、其の實際と來たら、世界萬國、てんでお話にならぬ代物も、また決して尠なくはあるまい。然りといへども、今若し理論の上より立言し、人生何ものか最も高尚なる

職務なるやを言はゞ、吾人は最も大膽にッローワーと聲を合せ、政治家の夫れを擧げざるを得ぬのだ。之を要するに理想的政治家は、人生最も高尚なる職務を有する、至高の地位を占めて居る。

『理想的政治家』

英のコルトン、なか〳〵甘いことを言ひた。

『其の行によらず、其の言に對して、政治家に報酬を與ふるは、眞に怪事と言ふ可し。其の言に依らず、其行に依りて判ぜよ』

斯ふ聞ては、誰とて御尤な仰せでござると、心から感服せぬ者は無いであらう。

實にコルトンの言を耳にしては、常識ある者、誰しも感服するに拘らず。どう言ふ譯なのか、兎角世人は、政治家を判斷するに、偏へにそが言に依り、其の行ふところに至つては、一向頓着せぬのである。由來政治家にして言論の雄と呼ばるゝ、素より光榮ならずんばあらずだが。苟くも政治家を以て、人生最も高尚なる職務を、鞅掌する者となすからには。高の知れた僕等といへども――若し實際、僕等を政治家たらしめたなら『言論の雄』などゝ呼ばれ、之を得意がるほど、爾く思想幼稚では無い。況んや僕等たらざる者おやだ。

既に政治家を判斷するには、言論に依らず、そが功績に依る可しとすれば。理想的政治家の何者たるやも、改めて此に之を說かずとも、十分明白ではあるまいか。惟ふにコルトンの、前言を成したる所以のものは、決して『報酬』を主としたのでは無く、實に政治家たらんものは、必らず當さに、實行に於て偉名を有すべく、努力すべしと諷したのである。

之が若し、陣笠連でゝもあらふものなら、必らず、そが薄ッぺらい唇を尖

らし

『口は自由なものと言つたところが、そんな馬鹿な議論を吐くのは止してくれ。政治家とは、政府と國民との中間に介在し、相互の利害の衝突に乘じて、或は私產を作し、或は名譽を得る道樂人である』

などゝ、俗氣衝天の豪語をものせらるゝであらふ。而してまた之が或は、當世政治家氣質でもあらふけれど。今若し眞面目に社會の眞相を觀じ、政治家の眞義を尋ぬる時には、如何なる沒常識漢でも、斯る妄言を承認する者はあるまい。矢張り政治家は、ツローワーの言ひしが如く社會民衆の幸福を增進し、宗敎家の所謂、黃金時代を實現すべき任務を負へる、即ち人生にありて、最も高尙なる職務を有して居るのだ。然らば即ち理想的政治家とは、勿論、

『獻身的精神を以て、國利民福の增進に努力し。國家の休戚を以て、自己の喜憂となす者』

たるは、誰しも同意するところで。要するに政治家は、博愛仁慈の人。若し儒者の口調を藉り來たれば、即ち堯舜の心を以て心となす、聖人の徒でなければならぬ。斯く言つたら、そんじよそこらの、ハイカラ連中は恐らく珍糞漢の寐言位に思惟し、必らずや一笑に附し去るであらふ。然れども眞理が、常に時間と空間とを超脫して、永世不易に、赫々の光輝を放つと等しく。理想的政治家の、堯舜の心を以て心となす、聖人の徒たるは、洋の東西に通じ、時の古今を貫ける、定說なりと斷言して差支はあるまい。

由來、人類と他の動物との區別は、一に全く理想の有無によりて生じ。また同じ人類に於ても、理想の高下が、直ちに人物の尊卑を決定するは、

吾人の常識の最も明白に認承する事理である。而して斯くの如く、理想によりて人物の尊卑を判定するのは、實に農夫にありても、下女にありても、軍人にありても、文士にありても、少さか相異は無いのだ。然らば即ち、理想的政治家は、必らずや理想的政治家の、當然懷くべき理想を懷いて居ることは、察するに餘りあることであらふ。

斯く思ひ、而る後現代の政治家を觀ずる時、誰か茫然自失せざるを得るだらふ。

『選擧祭』

祭禮と言へば、お稻荷樣の祭禮でも、天神樣の祭禮でも、兎に角大部分の民心を歡ばしむるが常。殊に僻村寒邑、年から年中、汗びつしよりに働き通し。芝居もなければ、義太夫も無く、たとへ水色の紋附は、長持の底にあつたところで。之を自身に着ける場合の無い人々に取りては、年に一度、氏神樣の御祭禮位、幸福な時はあるまい。

惟ふに祭禮が、幸福を伴ふのは、特り、寒村僻邑ばかりでは無いのだ。廣く世界に通じ、文野の別無く、實に祭禮は、人生の花期である。今若し人生より、祭禮を除去したら、此の世は如何ばかり寂莫を感ずることであらふ。さすがは、全智、全能、全善にわたらせたまふ、造化の神は英らいもの。ちやんと何千年の前から、祭禮の制度を設け、以て人生に與ふるに、斯る至大至深の娛樂を以てしたのであつた。

由來、人生の快樂は妙なもので、之を樂しむ人員が增加すれば、增加するだけ、其の快樂も增加するのである。若し之が疑はしいなら、試に緣日に往かるゝがよい。必らず人出が多いければ、多いだけ面白く思ひ、寒さでも强く、人出が少ないければ

『今夜は往き損だつた。寂しいことつてありあしない』

なぞと、不平を洩すに相違あるまい。と言つて緣日は、人を見るため出懸けるのでは無い。却て人出が少ない方が、埃にも汚れず、足も蹈まれず、頗る呑氣な筈だが、こゝが社交的動物の、社交的なる所以でゝもあるのか。埃に汚れても、足を蹈まれても、矢張り、人出が多く。若し前言を繰り返して言はば、即ち之を樂しむ人員が增加すれば、增加するだけ、其の快樂も增加することに成る。併し、素より拘子定規には、當嵌らぬ人生、勿論之れが除外例は澤山にあるだらふ。去りながら祭禮の一事にありては、之を樂しむ人員の增加が、直ちに快樂の增加を來たすのは、蓋し一定不易の眞理と承認せざるを得ぬ。

要するに祭禮は、人生の極樂で。斯の如く悲慘なる社會の、少しく棲む心地のするは、之れ洵に祭禮がある爲めと謂つてもよい位。古への聖賢、敢て祭禮と人生との關係を說かず。また今日に至るまで、祭禮を科學的に、若しくは哲學的に研究した學者も無いけれど、人生に於ける祭禮の効果は、なか〳〵大したもの。苟くも社會改善を念とせらるゝ世の君子は、面倒臭き倫理ぢやとか、宗敎ぢやとか言つたやうな、迂遠極まる研究は、全く之を拔きにして。單刀直入、祭禮を利用し、以て人生の娛樂を增加し、萬民をして多幸多福の生涯を送らしむる方法を、講ずべきではあるまいか。

されど、多くの祭禮の中には、飛んだ有害極まる祭禮もある。現に『選擧祭』なぞと來ては、てんでお話には無らぬ。由來祭禮の眞相は、必らず『超俗』或は『超自然』的勢力に對する、崇拜恭敬を基礎とすべきであるのが、選擧祭にありては、毫も崇拜恭敬等の美觀を認むる由は無い。啻に認むる由が無いばかりで無く、俗氣紛々、心ある者は、誰しも鼻をつまんで

逃げ出さゞるを得ぬ始末。なぜ政府は、斯くの如き祭禮を默許して置くのであらふ。

人若し政治家の眞髓を解し、代議士の精神を知るなら、安くんぞよく斯る馬鹿氣切つた、祭禮を事とするに忍びんやだ。政客の側面を觀ずるに當り、一言選擧祭の有害は、之れを注意せざるを得ぬ。

第五章　婦人の側面觀

『人生の美觀』

千辛萬苦を忍び、孝子、烈婦の勳功を樹てたる。さては幾度か死生の間に出入し、愛國忠君者の偉業を奏したる、斯くの如きは、眞に人生の美觀と謂つべきであらふ。人若し明治維新の歷史を繙き、幾多忠君愛國者のライフを窺はゞ、誰とて人生の美觀を以て、是等、大義の爲めに、身を殺したる偉人の功績に在りとなさゞるを得まい。

或は

『四十年來重五倫、　精忠却爲不忠臣、
日月猶是有私否、　不照檻倉獨坐人。』

と詠じたる前原一誠の如き。或は

『ほとゝぎす血に啼く聲は有明の、
　月より外にきくものはなし』

と嘆じたる江藤新平の如き。或は

『呼狂呼賊任世評、多歳妖雲今日晴、
　正是櫻花好時節、櫻田門外血如櫻』

と吟じたる黒澤忠三郎の如き。或は

『なげかるゝ身よりもなげく老の身を、
　なけきこそすれなげかるゝ身は』

と嘆ちたる平野國臣の如き。吾人は、是等の志士を以て、人生の精華と嘆美するに躊躇せぬのである。勿論、毀譽褒貶は人生の常。一誠と言ひ、新平と言ひ、共に其の終りを全ふせず、爲めに一部近現眼者流によりては、往々誹謗の的に供せらるゝ有といへども。而も明治史上、燦々たる光彩を放ち、長へに人生の美觀たる、蓋し識者の其の思を一にするところであらふ。

之を要するに人生の美觀は、實に大義を奉じ、時非にして、遂に坎坷落魄の生涯を送りたる、幾多志士仁人、烈婦孝子に依りて與へられてあるのだ。こは素より東西一致の事相にして、史家は筆を揃へて彼等を讃美し、また詩人は熱涙を灑ぎて、彼等を謳歌して居る。今若人生より、是等志士仁人、烈婦孝子を失つたら、此の世は如何ばかり、寂莫なるものと化し了るであらふ。

そも〳〵世人の多くは、現世を以て、或は『夢よりも果敢なきもの』と貶し、或は富貴權勢、共に『枯葉の末に宿れる露の輝きに異ならず』などゝ嘲けるものゝ。僕等は何處迄も、人生を以て健全なる實在と確信し、たとへ人生の榮華は、『沙の宮居』若しくは『雪の佛身』に髣髴せりといへども、猶ほ

沙の宮居を以て、築あるものとなし。雪の佛身を以て、尊きものとなすのである。

而してたとへ驕肆度なき運命は、常に才子を呪ひ、偉人を苦しむるといへども。吾人は爲めに天を咎め、若しくは世を恨むるやうな、野暮は致さぬ。實に却りて之が爲め、義士節に斃れ、仁人身を投し、依りて以て人生の美觀を添ふるものなりと思惟し、以て多大の感謝を拂ふのだ。若し夫れ運命が極めて溫順和平、慈悲に富み、毫も人を苦しむるやうなことがなかつたら、詩人は、何を思ふて熱涙を灑ぐてあらふ、史家はまた、筆を揮ふに由なく、實に欠伸しつゝ原稿用紙を染むるの外はあるまい。

然らば人生の美觀は、偏へに志士仁人、大義を奉じて身を殺す以外に、之れ無しと斷言してもよかろうか――勿論斷言しても差支は無いやうだが。そんじよそこらの醉樣達や、

『マア、そんなしかつめらしい議論は止してくれ。人生の美觀は酒にもあれば、花にもござる』

などゝ仰せらるゝに違ひ無い。言ふ迄も無く僕等として、人生の美觀を酒にも認むれば、また花にも認め、また大に『物言ふ花』にも認むるのだ。去りながら、事はそう明地に說き出しては、甚だ味が薄きもの。艶曲に語り出してこそ、始めて趣味津々として湧くの趣もあらふ。兎まれ角まれ、人生の美觀を以て、偏へに運命の戲弄に遭逢せる、悲慘なる志士仁人、さては孝子烈婦に在りなどゝ、議論がましきことを述べ出したのは、之れ全く本章の序論。實に孔子でも、釋尊でも、其の心底を詮議したら。

『人生の美觀は、婦人にあり』

と斷言するに相違あるまい。之は敢て僕の輕々しき斷定では無いのだ。現にかの十九世紀後半期に於て、北米思想界の重鎭たりし、ゼーム

スローウエルは、

『地球上、最も高尚なるものは、完全なる婦人なり』

と斷言し。また、マコーレーは

『世界にありて、最も美なるは、實に美女なり』

と確言して居るのだ。ローウエルの言、幷にマコーレーの語、此の二者を引證せば、人生の美觀の、一に全く婦人に在りて存するは、毫も疑念を挿はさむ餘地が無いであらふ。

『失戀者の妄語』

人生より孝子烈婦を去り、志士仁人を失つたら、誠に寂寞たる世界と成るであらふ。併し猶ほ之は、婦人を失つたに比すれば、ものゝ數では無い。實に婦人無き人生の、人生たる存在を全し得ざるは、改めて言ふまでも無い、一定不易の眞理で。斯る想像を描く者の常識こそ、甚だ以て怪しい次第である。第一化粧店、裁縫店なぞは、全く婦人あるの故に存續し得るので。婦人の居らぬ世界に、何處の拔け作か、コスメチックを用ゐたり、流行の帽子を、英ら相に被ぶるであらふ。

『若し女子なかりせば、男子は神の如く生きん』

と言つた、英のトーマス、デッカーは、餘程の沒常識漢と思はれる。恐らく彼は、幾度となく失戀の苦味を味はひ、夫れが爲め、遂に斯くの如く理性を失ひ、斯る妄言を口にするに至つたのではあるまいか。之は特りデッカーばかりでなく、實に失戀者は、多く女子を惡魔の如く罵詈するのが常だ。如何に女子は、腕力に於て男子に及ばぬとは言ふものゝ。自己の强力を恃んで、妄に女子を惡口するのは、男子に取りて、此の上も無い恥辱であらふ。

實に近頃では電車の中でさて、婦人には席を讓つてやる程まで、文化の程度が發達したのだ。而るに夫れにも拘らず、依然『女子と小人とは養ひ難し』なぞと、儒者振るのは、以ての外の心得違ひ。試に美しい處女を携え月下、喃々閑歩せる男を想像したまへ。苟くも自然の人情を有する者は、誰とて

『アヽ幸福ない奴だ。人若し思ふ女に愛せられたら、たゞ命だけあれば、夫れで澤山。名譽も、財產も、何も要らぬ……』

斯ふ私かに念ずるに違いなからふ。惟ふに一美婦人の爲め、國を傾け城を失つたのは無理の無い話。要するに女子は何處までも、人生の美觀たる價値を失はぬ。僕等の健全なる常識を以て之を見れば、競馬の爲めに破產したり、財欲の爲めに牢に入つたりするのは、實に不面目此の上無き愚物。併し戀の爲めに、祖先傳來の產を破り、時に或はかけがへの無い、命すら捨てゝ顧みぬのは、こはむしろ一種の光榮と見ることも出來やふ。蓋し婦人は人生最上の美觀で、この美觀にあこがれ、產を破り、命を捨つるのは、人類の本能を、最も大膽に發露せるもの。所謂自然主義の實行者である。斯くの如き無邪氣なる愚男や愚女や、小說家に依りて、甚深なる同情を與へらるゝは申す迄も無く、僕等とて、滿更

『氣の毒な奴だ』

位、思つてやらぬでも無い。

僕の所說を疑しく思ふなら、兼行法師の言を引證し。以て僕の所說の、永世不易の眞理を、含蓄せる所以を確かむることにしやう。實に法師は斯ふ言て居る——

『女のかみすぢをよれる網には、大象もよくつながれ。女のはけるあしだにてつくれる笛には、秋の鹿かならずよるとぞいひつ

たへ待る』

婦人の勢力は、斯くの如くであるのだ。然らば即ち

『久米の仙人の、ものあらふ女の脛のしろきを見て、通をうしないけんは、まことに、手あし、はだへなどの、きよらに肥あぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし。』

こは、永劫に彌りて否定すべからざる確說であらふ。若し夫れ

『よろづにいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうしく、玉の巵の當なきこゝちぞすべき』

などゝ來ては、一誦三嘆。之を耳にしては、お釋迦樣でも、跣足で遁げ出すに定つて居る。之を要するに婦人が、人生の美を集めて居ることは、一片の疑義を挾はさむ餘地無き一大眞理で。若し婦人に對し、罵詈惡口を事とする者あらば、そは即ち失戀家、所謂負け惜しみの餘り、惡くまれ口きく、ろくで無しと謂ふべきである。

『婦人の恐るべき半面』

僕は今日が日迄、人を戀したことも無ければ、また戀せられたことも無いと謂ふ、至て多幸多福の人物で。惟ふに婦人の側面觀なぞは、筆にすべからざる宿命を有して居るのかも知れぬ。隨て以上說き來たれるところ、即ち人生の美觀は、一に全く婦人の上に存在し、婦人無き人生は、太陽無きよりも、幾十百倍困るなんかと、知つたが振りに豪語したが、こは素より机上の空論に過ぎぬのだ。明らさまに白狀すれば、婦人がそんなに美しいものか、戀の味は、爾く結構なものか、知つても居らず、また僕如きに解し得やふ筈はござるまい。たゞブライトサイド(光明ある半面)より、讀書子的態度を取て、研究したる結果、實に以上の如き說を成

した次第。今若し他の半面、即ちダークサイド(闇黑なる半面)より同じく讀書子的態度を取て、考究せんか――――洵に婦人位恐しい、氣味の惡い動物は、無限大なる此の宇宙間に、多分二つとは無いぢやらふ。試に洋の東西にありて、人口に膾炙せる、婦人の惡性、並に婦人の缺點を詈れる俚諺を列擧したら。其數や、恐らく幾百千の多きに達するであらふ。實に婦人諸君に對しては、甚だ御迷惑千萬な次第ではあるが、諸君の善性を謳ひ、特長を稱へたる俚諺の如きは、殆んど皆無と言つても、よい位、此に至りては『曉天の星』などの形容は、大に薄弱なるを覺ゆるのだ――――之れ或は人生、男兒の殆んど總ては、失戀家なるためでもあるだらふか。左に記せる數個の俚諺によりて之を見れば、眞に婦人は、厄介極まる代物としか思はれぬ。

先づ

『女子の獨座靜思せる時は、常に不正なる事を考ふ』

の如きは、殆んど女子を以て、罪惡の塊團視せるもの。果して然らば、人生女子位恐怖すべきものはあるまい。其の眞僞は第二とし、獨座靜思せる女子の外貌は、如何にも何か、不正なる策略を運らしつゝある者の如くに見ゆる。また

『處女をして獨座靜思せしむる勿れ』

と言へるによりて之を察するも、兎角婦人の頭腦は、罪惡によりて支配せられてあるのであらふ。併し其の所以は、僕等の想察し得る限りにあらずだ。

※　※　※　※　※　※

『惡しき婦人に注意せよ。且つ善き婦人といへども信賴する勿れ』

斯ふ來られては、婦人たるもの、隊を作し、伍を整へ、以て男子征服の戰を宣告せざるを得まい。改めて說明するまでも無いが、此の俚諺は、即ち『惡しき婦人に注意し』『善き婦人といへども信賴する勿れ』と謂ふのだ。然らば婦人は、悉く危險千萬、寄る可からず、觸るゝ可からざるものとなる。

斯る言にして、果して眞ならば、婦人によりて征服せらるゝに先だち、男子こそ、婦人征討軍を發さゞるを得まい。實に先んずる者は、人を制すと謂ふではないか。一體世の宗敎家とか、道德家とか言つた連中は、何故、斯る危險至極な婦人を、其のまゝ生存せしめ。啻に生存せしむるのみならず、婦人は弱きものなる故、大に保護してやれぢやなどゝ、飛んでもない寐語を口にするんだらふ。惟ふに宗敎家でも、道德家でも、餘程目後が下つて居るものと見える。併し何故婦人は、爾く危險なものか、之れまた僕等には察知し能はぬのだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

『婦人の心と、冬日の風とは屢々變ず』

之れなどは、至りて平安無事な評言。去りながら、屢々變ずる女心、其の心を一定不易のものと心得、

『妾は、御身より外に愛する人はありません』

斯んなこと言はれて、得意滿面に溢れ

『天下の事、既に定まれり』

なぞと嬉しがらふものなら、夫れこそ一大事。

『手折るとも心ゆるすな櫻花
　さそふ嵐の吹かぬものかは』

と嘆じたのも、察するところ、小町が、自から自己の變心を表白したもの

に相違ない。兎角女に心を許すは不幸の基。併し僕が、自ら女子の心の、變り易く、移り易きを經驗したのでは無い、是れ亦讀書子の机上研究に過ぎぬのだ。

※　※　※　※　※　※

『婦人の力は、そが舌にあり』

之は御尤も至極。誰あつて異存は無いぢやらふ。實に女子最上の武器は、そが三寸の紅舌以外には無いのだ。明朝や綻びん蕾の唇、僅かに動かして

『わたくし、貴郎のためなら、地獄にでも參りますことよ』

さては、

『そんな酷いことお言ひなんですもの……わたくし死にます わ』

なぞと、有意か無意か、涙に濕へる震聲。斯ふ來られては、六尺有餘の鬚むしや男でも、顏の造作がらりと毀はし、平身低頭、恭々しく、そが足に接吻せざるを得まい。

『婦人の言ふところ、百中九十九までは信ずる勿れ』

極端な言とも聞ゆるだらふが。洵に婦人の力は其の舌に在り、うつかり口車に乘せられぬ用心は、男子に取りて、成功の基礎、幸福の泉頭であらふ。と言つて僕が、自から婦人三寸の舌刀によりて、負傷した覺はいさゝか無いのだ。

※　※　※　※　※　※

『婦人の落涙と、犬の跛行とは信ぜられず』

愈々出でゝ愈々妙とは、蓋し斯んな場合を謂つたものであらふ。然りといへども、僕は是れ迄、隣の婆樣が、孫娘に死なれた時と、湯屋の番臺女

史が、命より大事にして居る、貯金の通帳を落した時との外は、遂ぞ女の落涙を目擊したことは無いのだ。然らば即ち是亦た、單に一片の假定のみとして論せざるを得ぬ。

聞くところに依れば、女子は、兎角涙ぽいもの。別段大した刺激を受けずとも、咳一つするより容易に、潸然として落涙し得べき、頗る奇怪なる能力を有して居るとか。而して舌は女子最上の武器、大概な男子は、三寸の舌刀によりて、何の苦も無く屈服せしめられる。而に若し舌の力に合はぬ場合には、落涙と來るのだ。斯く觀ずれば、婦人は洵に怖しいもの。夫れとも知らず、世の男子は、何の物好きに、斯る危險極まる女子の握手などを求むるのだらふ。實に甚だしきに至りては、そが接吻をすら要求するのだ。馬鹿の種類は多いけれど、斯る連中に至つては、どだい日を同じうして語ることは出來ぬ。

以上既に、女子の危險なる半面を說き、僕は自ら、說き得て十分なりと信ずるのである。人若し女子に近接する便宜を有し、精察細觀せば、甚だ趣味ある研究を致し得るであらふ。吾が國に存在せる俚諺

『七人の子をなすとも、女に心ゆるすな』

の如きは、洵に之れ、婦人に取つては、此上なき耻辱ではあらふけれど。男子にありては、當さに一字千金の價値を有せる、坐右の銘なりと斷言して餘りあるだらふ。

惟ふに一面より之を窺へば、婦人は如何にも人生の美を、其の一身に收集して居る如き觀はあるが、之は所謂皮相の見。そが內實を精察すれば、必らず斯くの如く危險なる分子によりて、構成せられあるを認識し得るのだ。して見ると、婦人を戀したことも無ければ、また戀された覺

も無い僕の如きは、蓋し多幸多福、稀世の人物なりと、自尊の鼻を動かす資格があるだらふ。

『何故婦人は惡魔視せらるゝか』

『表裏黑白』とか、或は『人面獸心』とか言つたやうな事實は、人生いかに澤山あるにしろ。婦人が、其半面即ちブライトサイド(光明なる半面)より觀た時には、實に人生の美を、其一身に集めた如くなるも。他の半面即ちダークサイド(闇黑なる半面)よりすれば、眞に人生にありて、最も恐怖すべき動物たる觀を呈ずるが如く、爾く表裏黑白を異にせる事實は、蓋し人生、餘り其類を見出し得ぬのだ。

而して人生の美を、其の一身に集めた如き觀を呈ずる、こは誰の目にも映ずる、最も顯著なる現象で、改めて其の所以を說明するまでも無いが。而も婦人の、爾く惡魔視せらる一事に至りては、少しく說明するところ無きを得まい。

『婦人の猿智惠』

兼行法師の婦人觀は、なか〳〵巧妙に出來て居る。

『ふかくたばかりかざれることは、男の智惠にもまさりたるかと思へば。その事あとよりあらはるゝをしらず。すなほならずして、つたなき物は女なり』

『女の猿智惠』とは、實に斯くの如きを言つたのである。この淺き陰險なる猿智惠、之に加ふるに、天女のやうな顏面、鐵をも溶かす猫撫聲。たとへ其のたばかりかざれる事は、忽ち化(はけ)の皮が剝げるにしろ、世の鼻下長連たる者、斯る女子のてれんてくだに逢ひ、安くんか能く一本參らざ

るを得やふ。今此に、這般の眞相を見體的に表彰せんが爲め、男たらしに妙を得た菫子孃を捕へ來たり、以て孃が手腕の程を記して見やう。

菫子孃は、英語專門學校の生徒で、基督信者である。其の筈、何處に往くんでも、必らずバイブルを手にせぬ時は無い。たしか、此の前の日曜だと思つた、例に依りて例の如き、ハイカラ風を吹かせながら、芝公園を散歩して居る。

どう言ふてれんていくだを用ゐたものやら、財布の重かりそうな、坊ちん書生を捕へ。話がだん〳〵進むにつれ、菫子孃、眼を濕し

『世界で、私位不幸な者がありませうか。親は無し、一人の兄には見捨てられ、誰一人愛して下さる方が無いんですもの……神樣の愛――誠に辱けないですけれど何處に神樣がゐらつしやるか見えないぢやありませんか……』

切れるばかりに、坊ちやんの右手を握りつめ

『あなたのやうな方、ほんとに愛して下されたら、どんなに幸福でせう。始めて生存の樂を味はひますわ』

まるで芝居仕掛だ。坊ちやんの精神は、既に痳痺して居る。本式に泣き出し

『菫子さん。僕、生命も、財産も、全く犧牲に供して、あなたの幸福を計りますよ。いゝです、何も私が引受けました』

此に忽ち、所謂『神聖なるラブ』が成立したのであつた。惟ふに菫子孃、後に向て、ベロリ三寸の紅舌を吐き、心中『野呂間も程がある』と、嘲けつて居るに相違無い。

借問す『戀と利益』女子に取りて孰れか重いであらふ――素より枰に掛けて、驗する術は無いが、僕等をして言はしむれば、實に今時の女子に

ありては、

『金無き戀は、汁無き林檎に異ならず』

と、變哲學の秘條を吐露するが、百人の中九十九人までの女氣質。而るに間拔けな敎育家などは、

『處女をして、戀愛趣味の小說、乃至演劇に近接せしむるは、危險の極なり』

なんかと、日本で申さば、足利時代にでも流行つたやうな訓誡を、さも英らそうに仰せらるゝのだ。之は以ての外の誤解、戀故に身を損ふ如き、無邪氣な處女が居たら、夫れこそ珍無類な見せ物である。要するに今時の處女は、戀の味を知らぬでは無いが

『戀を方便として、利益を收む』

てふ、プラクチカルラブ(實際的戀愛)とでも、命名すべき戀愛を藏して居る。かの戀故に、終生の計を誤るなどゝ言ふ、粹な眞似は、眞に藥にしたくても見ることは出來ぬ。否之は特り近代の戀愛思想では無いと見へ、近松の『長町女腹切』の中にも、ちやんと這般の消息を語て居る――

半七の伯母の訓誡に

『世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない』

斯ふあるが。して見ると『戀は盲目なり』も、餘り當には無らぬ戲言。地獄の沙汰も金次第、戀も矢張り金次第であらふ。

『金次第であらふ』どころか、金さへあれば、どんなよい女房も持てるのが、人世の習はせ、況んや之は菫子孃、腹の中では

『何だ此の坊ちやんが、神聖な戀愛も、圓滿なる家庭もあつたもの か、財布の重い間は、幾千代かけて愛してあげますよ』

深く斯ふ思ひ込んで居るのだ。年にも似合はず、なか〳〵悟を開いた

もの。處が兼行法師の仰せ通り、こゝらが女の淺き猿智惠、『その事あとよりあらはるゝを知らず』で、何時とはなしに坊ちやんを冷遇し始める。坊ちやんは、むきになる、嬢さん、といふのつまり『あばよ』と來る。是に於てか『女子は惡魔なり』なんかといふ斷案が生まるゝのだ。約言すれば、即ち曰く――女子は旺盛なる利己心を懷き、戀愛によりて、そが利己的欲望を滿たさんとするも、智惠淺きが故に、多くは半途にして失敗す――

之れなどは、僕の平生にも似つからぬ、眞に剴切なる言明であらふ。

『婦人の生學問』

兼好法師更に曰く

『其心(女の心)に隨ひて、よく思はれんことは心うかるべし。されば何かは女のはづかしからん。もし賢女あらば、それも物うとくすさまじかりなん』

元來利己的性情に依りて、支配せられつゝある女子斯る動物によく思はれんなどと考へ出したら、夫れこそ大騒動。實に財產は勿論、生命まで放棄して、乘り出さなければ、思ふ女に可愛がられやふ道理は無い。

『されば何かは女のはづかしからん』とは、兼好法師、眞に萬載不磨の金言を吐かれたものだ。

然れども『賢女あらば、それも物うとくすさまじかりなん』に至ては、いさかか說明の勞を取らねばなるまい。實に之が說明を試むるに先だち、兼好の所謂『賢女』とは、如何なる婦人の謂なるか、夫れを確かめねばならん。『美女は、至る處に歡迎せらる』と嘆稱したる、彼バイロンは

『余は學識ある婦人を惡くむ』

と言つて居る。清少納言なぞと來たら、恐らくバイロンによりて、糞のやう惡口せらるべき婦人に違いなからふ。何が故にバイロンは、學識ある婦人を惡みたりしか――之は吾人をして、趣味ある研究を致さしむるのである。

改言する迄も無く、婦人の知識は知れたもの。而して知識の少なき者に限て、智者振りたいは人情の常。況んや之が女子と來ては、猶更の事だ。一から十まで、さも學者らしく、やれ『學理に背く』の、やれ『そんな定義はありません』のと來られては、誠に辛棒が出來たものでは無い。試に金緣の眼鏡かけた、肩の怒つた、バイカラ女史を御覽じろ。そが高慢面、心ある者に取ては、眞實二度と見られた御樣子では無いのだ。こんな婦人を女房に持つた男の不幸は如何ばかり……實に顏を洗ふ湯さへ、取つてやらねばならぬ運命は、察するに餘りあるだらふ。バイロン先生、なか〳〵乙な言を殘されたもの。

一體學問を鼻にするのは、女のみに限らず、男の仲間にも隨分多い。鸚鵡の寐言見たいに、何が何だか、さつぱり譯の分らぬ、學問上の術語等使ふのは、此上なしの氣障さ加減、洵に身の毛がよ立つ思がする。而して之が男女に通じ、生學問の弊害であるのだ。今若し兼好の所謂『賢女』が、バイロンの所謂『學識ある婦人』一流の、代物を指したとすれば『物うとくすさまじかりなん』とは、蓋し不易の名言なりと歎稱せざるを得まい。改まつて斷はる必要も無いが、兼好の『賢女』を以て眞面目に解釋し『賢女とは賢い女のことだ』と思惟する如きは、洵に不智の頂上。例之ば

『彼奴も、聖人の一類ぢや』

の半面には、常に

『彼奴は愚物ぢや』

の意味を藏し。『善人』とか、『正直』とか、『偉人』とか、言つた言葉の裡面には、『鈍者』とか、『猾徒』など謂つた、厭ふべき惡意を包蓄するのが常習である。夫れと同じく兼好の『賢女』また之れ『生學者』若くは『屁理屈家』等の、嫌惡すべき意味を藏することは、想察するに難くはあるまい。

『婦人の眞面目』

兼好法師は最後に

『たゞまよひをあるじとして、かれに從ふときは、やさしくも、おもしろくも、おぼゆべき事なり』

と斷言して居る。

『たゞ迷をあるじとして』とは、兼好法師、よく〳〵思ひ切つたことを言つたものだ。之に由りて之を見れば、女子は確かに惡魔の本性を有して居ることが分明するであらふ。佛國著名の文士フォントネル、曾て美婦人を評し

『精神の地獄、財囊の罪障、眼目の極樂』

てふ、頗る巧妙なる諷議を成したのであつた。惟ふに夫れに相違は無い。『傾國』とか、『傾城』等の文字は、沈腐、語るに足らずとしても、古來今日美女の爲めに、一身を誤り、一家を破りたる者、幾百千萬の多きに達するであらふ。日々吾人をして、堪え難き悲感を懷かしむ、新聞の三面記事や、實に其の多きは、所謂『美女』の所生ではないか。若し夫れ美女にして爾〻男子の精神を痳痺せしむる無く、隨て男子や、一生の方針を誤る無く、また隨て罪惡を犯す無しとすれば。實に小說家、詩人、俳優等は、明日の日より、米鹽の資に窮する、始末となるではあらうけれど。而も美女が『精神の地獄』即ち、吾等男子の精神を墜落せしめ、以て地獄の苦患に呻

吟せしむるは、毫も疑ふ餘地無き事理である。

羅馬天主教には『罪障』なる術語がある。之は即ち、或る種の罪惡は、或る方法に依りて、障滅することが出來ると云ふ意味である。

處で美女は、『財囊の障罪』、即ち財囊の罪を障滅してくれると謂ふのだ、罪障の語は、甚だ難有が、而も財囊の罪障は、御同樣餘り有り難い感じは致しまい。即ち美女は、財産を消失し、以て財産を作つた罪惡を、障滅して呉ると謂ふ次第。道理は至て尤もだが、事實は頗る心細い話。惟ふに之れ亦た、女子の惡魔たる所以を確證するものであらふ。

『眼目の極樂』とは、言ひ方が甚だ趣味に富んで居る。併し之は半句の說明をも要しまい。

今若し、フォントネルの言によりて之を見れば、美女は、眞に有害無益の動物。女尊男卑のお國柄だけあつて、ぶつつけに『美女は惡魔なり』とは、仰せられぬけれど。そが艶曲なる諷譏の裡面には、明らかに惡魔の意味を認むることが出來る。さても〳〵婦人は困つた動物なる哉だ。

然らば即ち、まよひを主として、婦人をあしらひ。只單に眼目の極樂をだに得れば、滿足し。精神は、地獄に墜ちやうが、財囊は、奇麗に罪障して空にならふが、そんな事に頓首せぬのなら。斯んな愉快なものは、宇宙廣しといへども、またと二つはあるまい。されば、こそ兼好法師『やさしくも、おもしろくも、おぼゆべきことなり』と確言したのであつた。惟ふに婦人の眞面目は、這般の底に存在して居るであらふ。

※　※　※　※　※　※

何故に婦人は惡魔視せらるゝか――――以上說くところ、即ち婦人の猿智惠、生學問、並に眞面目の三項や、讀者諸君をして、婦人の爾く惡魔視せらるゝ所以のものを、略々納得せしめ得たであらふ。既に婦人の惡魔

視せらるゝ所以を略々悟了したる上からは、一歩進んで『如何にして婦人に愛せらるべきか』を說く、蓋し適當なる順序と謂ふべきだ。

『如何にして婦人に愛せらるべきか』

成功と言ひ、幸福と言ひ、男兒に取りて、重大なる人生問題は、敢て三四の少數に止まらぬことは、素より瞭然たりだが。『如何にして婦人に愛せらるべきか』位、重大なるものは、また外に之れ無しと斷言することが出來やふ。試に古來今日、幾百千人の男子が、貴賤を問はず、老若を論ぜず、如何にして婦人に好愛せらるべきかてふ、この深遠なる人生問題の解決に、腐心したりしやを想つたら、竦然として襟を端さゞる者はあるまい。

また若し、人生此問題を解決し能はず、爲めに、切角有爲の材を懷きながら憂恨煩悶、徒らに、一生を、嗟嘆呻吟の裡に送れるかを想はゞ。名僧善智識にまれ、はた大政治家にまれ、如何にして婦人に愛せらるゝかてふ、この重大なる人生の問題の解決が、一刻も早く社會に發表せられんことを希望するに相違なからふ。僕未だ曾て、戀の甘苦を知らずといへども、讀書靜觀既に多年、また處世の辛酸を嘗むる此に幾歲、自から敢て、この重大なる問題を解決し得べしと信ずるのである。と言て萬々一、當らざるあらんか、『猿も樹から墜つれば、弘法にも筆の誤りある』習はせ、平らに御容捨願ひたいもの。

『婦人の高慢に乘ぜよ』

第一條件として、婦人の高慢に乘ずべき方法を講ずるが至當であらふ。由來、高慢は人間の通性。若し之を、或る種の道德家の口調を藉り來た

り て『人間の弱點』と稱すべきならば、人間共通の弱點は、即ち高慢の外には無く。また若し之を、或る種の詩人の筆法を藉り來たりて『人間の美觀』と呼ぶべきならば、人間共通の美觀は、即ち高慢の外に無いだらふ。併し高慢が、果して弱點と稱すべきか、美觀と呼ぶべきかは、素より僕等、婦人側面觀察者の、敢て深く關する問題では無い。

強慾極る高利貸の、天保爺

『あなたの御聲は、天下一品ですな』

斯ふ持ち上げられたので、低い鼻を妙ちきりんに搖かし

『ナーニそう言ふ程ではないですが、義太夫は、母の胎内に居た時分から、好きなので、婆やの脊に負はれながら、太閤記のさわり位は、ずん〳〵爲て居たのです。マア素人仲間では、心打が出來ませうよ』

斯くの如く慢心する。相手は、此處だと附け込んで、

『では大夫、御暇の時、一段御願ひ出來ませうか』

更に語を繼ぎ、頗る眞面目切つて

『實はネ、京大坂から、大夫と言ふ大夫は一人だつて聞き落した、覺えはないんですが。眞實、あなたの右に出づる者つて、ありあしませんや。せめて月に一度、御聞かせ下さることが出來ますものなら。七十の命なら、六十に死んだつて、いさゝか殘り惜しくはございません』

斯ふ煽ぎ立てる。煽ぎ立てられた爺樣、いよ〳〵圖に乘つて、にこ〳〵者

『そう御賴みを受ては、何とか暇を作つて、一段御耳に入れぢやなりますまいて……善は急げだ。今晩五時頃から御出でなさ

い。十二時まで爲れば、一時間に一段語つても、五段は出來まさあ。夕飯は御馳走致しませうよ、久振りだから』

轉んでも、只では起きぬ高利貸、どう言ふ虫のせいか、不思議にも今日は、夕飯まで振舞つて、其上貴重の時間をすら惜まぬと言ふのだ。惟ふに、是れなぞは、確かに高慢を以て、人生の美觀と見可き、確實なる社會現象であらふ。

實に人生の墮落して、遂に豺狼の社會と化し了らざるもの、他に多くの原因、之れ無くんばあらずといへども、而もそが重且つ大なるものは、恐らく『高慢』を以て首位に置かざるを得まい。

然れども高利貸の天保爺、斯くて、鰻丼一つ、茶、菓子、石油……總計三十何錢を費し。其の上、甘く掌裡に丸め込まれて、無利息、無期限、且つ證文無しに、十圓の大金を、二つ返事に貸し與へたのだ。斯くの如きは、特り天保爺のみならず、實に人生幾何の男女か、日日夜々、高慢故に、失敗の深淵に陷りつゝあるだらふ。斯く觀ずれば高慢は、人間にありて、實に最も慨すべき弱點と呼ばざるを得まい。

要するに高慢を以て、一は弱點と呼び、一は美觀と稱す。兩者素より共に是にして、たゞ其の見地の異なるより、斯る大差を來たしたものである。遮莫、人若し社交の術に長じ、光榮ある生涯を送らんと欲せば、實に先づ――『如何にせば他人の高慢に乘じ、以て自己の企圖を完成し得べきか』てふ、重要なる處世問題を明解し置かざるを得ぬのだ。而して今此に、婦人に愛せらるゝ手段方法として、婦人の高慢に乘ずべき祕策を說く。之れ蓋し、特り婦人懷柔策たるばかりでなく、實に同時に、處世策の要訣を說明せるものと、見ることが出來るであらう。

そも〳〵高慢は、人間共通の弱點と見るにしろ、また共通の美觀と見る

にしろ、男子に比すれば、女子に在りて、殊に旺盛なる通性で。どんな賢婦でも、才女でも、高慢の鼻柱を、ピク〳〵搖かさぬは無いのだ。而してその高慢は、財産よりも、名譽よりも、學識よりも、實に容貌に在りて深甚。今若し九十九の皺くちや婆樣を捕へ

『今夫人、あなたの處女時代が想ひやられますな……今でも四十か、山々四十五六しか見えんですからネ。山中曆日なしでは無く、美人に曆日無しとは、蓋し萬載不易の眞理でせうな』

婆さま、乙に濟し切つて、

『之でも若い時は、あなたのやうな殿御に、隨分注目されたものですよ。併し寄る年波には、致方がございません』

『寄る年波とは、聞て驚きましたね。あなた四十以來、ちつともお年を占さんではないですか。私はちやんと記憶して居ます。』

此の男、當年三十五歳。婆樣が四十の時と言へば、今より五十九年の昔。實に彼の生まるゝ先だつ、廿四年となる計算。幾ら何でも餘り甚い。併し兎に角お世辭は、斯んな間違が多いもの。

婆樣、嬉し涙をそつと拭ひ、之も色目の一種か、氣の弱い僕等であつたら、見るから氣絶しそうな、奇怪千萬な風態を演じ、

『私は、何日もあなたにお目にかゝると、氣が清々致しますよ。どうか宅にお立ち寄り遊ばして、晩食でもお上りくださらんか』

早速晩餐にありついた話。惟ふに之が婦人一般の高慢で。若し色の黑い婦人を見たら、

『あなたの壯健な御顏色は、眞に美中の美ですナ。私は、蒼白い顏ほど嫌いなものはありません』

斯ふ煽ぎ立て。若し色の蒼い婦人を見たら、

『あなたの優美な御顏色は、眞に美中の美ですナ。私は、赤黑い顏ほど嫌いなものはありません』

斯ふ持ち上げ。若し大きな婦人を見たら、

『あなたの威風凜々たる御姿は、眞に美中の美ですナ。小さな者は、いかに高貴な服裝しても、一向見榮が無いものです。』

斯ふ阿諛を奉り。若し猫脊の婦人を見たら、

『あなたの溫順閑雅な御姿は、眞に美中の美ですナ。鳩胸と來たら、私未だ曾て嘔吐を催さゝる時が無いです』

斯ふお世辭を並べ立てるのだ。何でもかでも婦人さへ見れば、『如何なる點を捕へたら、此婦人を以て、美中の美と稱し得べきか』と思ふのである。格別彼女の、自から弱點とし、缺點とし、最も苦心憂慮しつゝある個所を發見し、此の個所を以て、却りて長所なりとして、其の高慢に乘ずるは最も靈驗ありと斷言してよからふ。改めて言ふ迄も無いが、人間は妙なもので、自己の、自己に對する判斷位間違へるは無く。隨て人、苟くも聖賢ならざる限り、自己の、自己に對する評價を、一定不易のものとして、固持する如きは、眞に皆無と謂てよいのだ。試に今日が日まで、

『なぜ自分の鼻は、斯んなに無細工なんだらふ。せめて此の鼻が普通であつたなら、美人の仲間入りは出來たらふものに』

斯ふ、夢現、鼻のみに苦心憂慮しつゝあつた、はなはだ御氣の毒な孃樣に對し。斯んな巧妙なる阿諛を呈じて御覽じろ。

『あなたの鼻には、言ひ知らぬ愛嬌がありますね。無細工などゝは以ての外の妄言。若しあなたの鼻にして。無細工と言ふべくんば。善を盡し、美を盡した茶室も無細工、庭園も無細工。惟ふに天上天下、美と稱すべきものはありますまい。併し美ならざ

るものより、美なるものを見たら、成る程美なるものは、頗る無細工でありませうよ。　されど、あなたが自から、御自分の鼻を無細工なぞと、怨言を口にするは、之れ全く天に向て矢を放つ者。今に屹度、罰が當りますせ』

嬢樣忽ちにして

『そうかも知れなくつてネ。　して見ると私は美人だわ』

早速、手製の靴下位に有りつく道理。　之を要するに、婦人の愛を得んとすれば、實に婦人の高慢に乘じ『美中の美』てふ褒辭を奉るべきである。

而して斯の褒辭は、必らず婦人自から『缺點』として、憂ひ來たれる個所を發見し、此の個所に由りて、呈すべきを忘れてはならぬ。

『金離れよき男となれ』

故人に成つた、齋藤緑雨のはきはきした文章は、何時見ても至極面白い。其の何時見ても至極面白いのは、はきはきした文章では無く、實に其のきびきびした思想である。　難しく言へば、即ち單刀直入、人の肺腑を衝き、諷譏よく人の骨に徹するとでも謂つたやうな文字で。　彼や終生、餘り人の知るところとは成らなかつたが、確かに明治文壇に在りて、一方の勇將たる價値は、十分に之を有して居る。

『金離れよき男』とは、彼の口癖のやうに歎美したところのもので。　殊に彼は、酒樓に親しむ者、妓女と樂しむ者を訓誡し、常に斯んな工合に語つて居る――道理を考へたり、算盤を取て遊んではゼロ。　酒樓は人を遊ばしむるところ、妓女は人を樂しましむる者。　而して快を與へ、樂を授くるは、一に全く金の力にあるのだ。　切角遊ばせて貰ひ、快樂を得やうとしながら、而も金を惜しむやうでは、之れ所謂、木に緣りて魚を求む

る類。識者の爲すところでは無い。……

若し、綠雨の言

『彼の里、此の巷に足蹈入れんに、なるべく多く金遺るこそ當前なれ、遺らぬは寧ろ不法なり』

と謂ふを聞かば、誰とて膝を打て、快哉を叫ばぬ者は無からふ。殊に

『遊びは人の餘裕なれば、餘裕なき人は、遊ばざるに若かず。遊びて惜しみ、惜しみて猶ほ遊ばんとするが如きは、興を偷むものなり、興の賊なり』

に至つては、蓋し萬載不易の銘案なりと、斷言して毫も差支はあるまい。

要するに、古來通人粹者の

『馬鹿遊びせねば、遊んだ心地がせぬ』

と言へるは、特り正直正大夫綠雨先生のみならず、野暮の骨頂とも申すべき僕等といへども、猶ほ同感である。

綠雨の嘆美せる『金離れよき男』は、特り酒樓の神樣、妓女の守本尊たるばかりで無く、教育界にあるも、宗教界にあるも、常に最も名望あり、はた最も信用ある地位に立つのだ。實に頑是無き子供仲間に在りてすら、

『金離れよき』子供は、常に必らず、餓鬼大將たる、光榮ある尊爵を保ち。

今若し

『金離れよきは、成功の秘條なり』

と斷言する者あつたところで、『馬鹿言へ』などと、一言の下に叱り飛ばす譯には往くまい。啻に叱り飛ばし得ざるのみか『大に然り』とか、『御尤も千萬』位に、感服するは保險附。百圓の月給取りも、五十錢の日給取りも、巨萬の富豪も、文無しの三助も、苟くも意味ある生活を營まんことを期すれば、流行の衣裳を拵らゆるに先だち、はた人中に恥ぢぬ禮儀を習ふ

に先だち、必らずや當さに『金離れよき男』たる、考案を運らさゞるを得まい。

要するに『金離れよき男』は、常に社交界の成功者と成り、催鬼までも、金離れよき男に對しては、酷なる言を用ゐるに忍びず、多くは同情を寄するが常。然らば即ち、本來爾く利己的心情の盛んなる、婦人に愛せられんことを期する者、安くんぞ『金離れよき男たれ』と言つただけては、何だか、意義茫漠たる併し只單に『金離れよき男たれ』たらざるを得んやだ。

嫌がある。故に諸君をして、之が實行を易からしめんが爲め、少しく具體的方面に、筆を執ることに致そう。

○婦人に對する贈物は、必らず最上を選べ

『此の次のだつて、見たところは同じだのに、ほんとに金離れの奇麗な人よ』斯る讃辭を受くるは素より受合。而して一たび、婦人に斯る信念を與へんか、既に彼女の、我を尊重し、我に親愛するは一片の疑義を挿はさむ餘地が無いのだ。而して以後はたとへ、二等、三等の品を贈るとも、所謂先入主となり、矢張り最上の物として、多大の感謝を拂つてくれるのは、察するに餘りある事理である。

○婦人より物を贈られたる際は、少なくとも三倍にして返禮せよ。

『自分を愛せる故に、斯る贈物を致したのだらふ。三千世界、いかに廣しといへども、色男は自分の外にあるものか』なぞと澄まし込み。只でせしめてやるやうな心懸では、百萬劫の後といへども婦人に愛せらるゝは覺束無い話。實に『婦人は欲の動物』と信じ、そが物慾をさへ滿たしてやれば、どうにでも成ると高を括り。物を贈られたら、少なくとも三倍位にして、返禮せんことを期す

れば、必らずや早晩『義理が堅くて、金離れのよい方だ』と敬愛せられ。我が寫眞の長へに、神棚に尊置せらるゝは、蓋し前聖後聖、其の恩を一にするところである。

○婦人の面前にては、如何に高價なる品物にても、値切る可からず。骨董品とか、植木でゝもなければ、幾ら懸値しても高の分つた話。よしんば一圓の品を九十錢。十圓の言値より、五十錢値切つたところが、ほんとに知れたもの、斯くて『けちな人』てふ、汚名を與へらるゝは、甚だ心外の事ではあるまいか。實に十錢か、五十錢の損で、『金の上は、ほんとに奇麗な方ぬ』などゝ評せらるゝは、至極幅の廣い心地がするであらふ。こは『金離れよき人』と褒めらるゝ最大條件の一である。

○婦人の面前にては、茶代心附等、他人の倍格を張込む可し。

茶代を與えらるゝ者、心附に與かる者、皆な之れ我利々々亡者の身内。一圓に對して、一度頭を下ぐるものならば、十圓に對して、十度頭を下ぐるは、數理上、確定せる原則に成つて居る。斯くて意中の人は、『金離れのよい方』と賞讃するのだ。惟ふに一舉兩得とは、蓋し、斯ふ言つた事實を指したものに相違あるまい。

○婦人の面前にては、決して金錢の事を口にす可からず。武士は、飲食財貨の事を語つて成らぬとは、實に謙信公の訓戒である。『何處の料理屋で、二十圓取られたのは、高價ぢやつた』とか『此の指輪が三百ドルとは、大に安い』とか……御本人は之を以て、殿樣位な積りであらふが、側に聽て居る者は、少々片腹痛い心地。況して之れ聞けがしに、婦人の前などでやらふものなら、意中の人、忽ち肘鐵砲御見舞い申すは必定である。

さすがに綠雨、なか〳〵甘いこと言て居る。『よしんば、幾ら使つたといふことありとも、いくらで濟んだといふこと勿れ』何事に拘らず、金錢の事、口にするは、お里が見えて、賤しきものだ。

『自慢する勿れ』

自慢氣の無い者は、此の世にたゞの一人だつてあらふ筈は無く。實に高慢は、確かに人間の通性である。ところが妙なもので、人として、自慢氣を有せざる者無きに拘らず、人として、他人の自慢氣を惡くまぬ者は無いのだ。殊に婦人に在りて、其の最も甚だしきものあるを認むるのである。然らば即ち、婦人に好愛せらるゝ條件として、『自慢する勿れ』と謂ふ、之れ眞に、金科玉條と稱するに餘りあるだらふ。

而して自慢にも種類がある、されど『容貌の自慢』『財產の自慢』『學識の自慢』『藝自慢』……斯くの如きは、自慢中の最も嫌惡すべきもので。特り婦人のみならず、吾々男子といへども、斯る自慢に接しては、誰しも同樣、齒の浮く思して、やがて

『斯んな、いけ好かない野郎とは、もう二度と口をきくものか』

と、飛んだ覺悟の臍を堅むるのだ。尤も人間は、本來利己的動物なので、何か御自分の利益になることなら、

『あなた位な好男子は、三千世界に二人とありませんよ。女と生れて來た甲斐に、ほんの半時でも、膝を合はして、氣儘に居たいもの』

なぞと、甘つたるいお世辭を並ぶる場合、無きにしもあらずだが。其實、半時たりといへども、側には居たく無いが山々。さて〳〵金の威光は大したものである。して見ると、金持の言つた事は、幾ら平凡でも氣拔

に聞え。文無しの言は、たとへ千載不磨の金言でも、沈腐に聞ゆるのは、蓋し理の當然であらう。兎角人生は金次第。『富豪の孃樣は、悉く美人ばかり』とは、穿ち得て至極妙。人生金の光によりて、美はしく見えぬは、絶無なりと言つたとて、滿更の言でもあるまい。

併し、僕等の所謂『婦人に依りて愛せらるゝ』は、金の光りのみに依りては甚だ心細い。尤も詩人張謂は

『世人結交須黃金　黃金不多交不深
縱令然諾暫相許　終是悠々行路心』

と絶叫したが、或はそうであらふ。そうであらふが之は、矢張り甚だ心細い。實に何とかして

『ほんとに、私はあの方の氣前に惚れた』

とか、

『何んて高潔な氣象の方でせう。私あんな方となら、偕老の契を結んでよ』

などと言て貰ひたいものだ。惟ふに是れは、特り僕等のみでは無く、ニキビだらけの法學書生も、湯屋の三助どんも、頭髮のテカ〳〵した會社員も、さては聲のシヤがれた重役殿も、必らず斯く念ずるに定て居る。既に然らば、自慢は以ての外の障害物。諸君にして、一片自慢氣があらふものならば、たとへ幾ら金離れがよくても、また幾ら男振りが好くても恐らく終生、失戀の涙にかきくれざるを得まい。

紳士は、當年三十二歳の男盛り、會社の俸給は知れたものだが、少々財産があるのと、經濟の觀念發達し、一文でも無駄な費用は、出さぬと謂ふので、餘程懷中は暖かい方。且つ男振りも、惡い方では無く、夫れに意中の人の前では、一寸金離もよいと來て居る故、決して持てぬ道理は無い。

處が此の男、自慢の念甚だ旺盛、實に何と言へば、財産を鼻に懸け、さては男振りを口にするので、意中の人、近來大に嫌氣がさして居る。

『いけ好かない人ね。あんな顏が、何で自慢する値打があるものか。あれで好男子なら、オワイ屋さんは、日本一に違ひ無いや』

斯んな、皮肉極まる嘲笑を浴せかくるのだ。夫れとは知らぬ紳士、

『どうだ、三百五十圓の衣裳は、矢張り夫れ丈けの價値があるネ。よく似合ふだらふ。男振が數段上つたに違い無い』

とか、さては

『同じ指輪でも、十圓のよりか、百圓の方がよいナ、挿した心地も違ふだらふ』

などゝ自慢する。自慢せられて見ると、切角嬉しかつた指輪も、一文無しに見ゆるが人情の常。實に時には、

『何だ斯んなもの……貰て迷惑さ』

と言つたやうな暴言さへ、口にしたくなるのだ。兎角自慢は禁物。特り婦人に對する時のみならず、自から自己の價値を吹張するは、此の上無き不得策。アディソンの

『自己の舌を用ゐ、自己を賞讃するは、實に自己の名聲の、小にして且つ減退しつゝあるを示す。加ふるに自畫自讃は聞く者をして最も嫌惡せしむ』

と語つたのは、眞に玩味すべき金言であらふ。且つ苟くも婦人に愛せられんが爲めには、當らく婦人の高慢に乘ずべきを知らば。自慢するの弊や、洵に察知するに餘りあるだらふ。

『しつこくするな』

商業家も、文學者も、工藝家も、敎育者も、事に全力を傾注し、一意專念、赫々の成功を期待するは、甚だ緊切事の如くなれど。而もそが熱心の度合は、極めて肝要なもので。之が誤ることと僅かに一歩、『熱心』の範圍を越えて、『しつこし』と謂ふ段になると、決して光榮ある成功を致し得るものでは無い。そも〳〵、『熱心』と『しつこし』との差異――こは、なか〳〵味のある研究題目である。

何事でも『しつこく』懸るのは失敗の源、古諺に所謂『過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し』の如く、熱心の度が過ぎ『しつこく』なれば、其の弊や、『冷淡』よりも、更に甚だしきが常である。殊に婦人に對する場合に於て、最も其の然るを認むるのだ。若し夫れ『冷淡』を適度に實現し、『淡泊』の境に處することが出來れば、夫れこそ、萬事に成功する基。惟ふに『淡泊』と『熱心』とは、一にして二ならず。即ち一事の兩端、一物の兩面、二にして而も一なるものである。

既に前きにも詳述したる如く、本來婦人は、勝手氣儘なもので。男の方では、命を賭して迄も愛して居る間は、我を遇する、宛然冬日の扇。『そんな物、私には用がありませんよ』と言はぬばかりの冷遇。而るに心機一轉、『斯んな無情な女は、一刻も早く思ひ斷るが、智者の爲すところだ』と、ツッパリ斷念する。斷念した頃に、意外にも婦人は、始て少しく愛の香りを送り始むるのだ。實に斯る驕慢なる婦人には『しつこい』が何よりもの大害。昔の粹人の言へるに違はず

『粹の本質は、淡泊なるに在り』

とは、蓋し萬載不易、婦人に愛せられんことを期する者の、金科玉條として、奉體すべき名敎訓であらふ。

ところで人生、自から粹人たらんことを欲する者や、斯くの如く多きに

拘らず。而も粹人の、斯くの如く稀れなるは、所詮『淡泊』なることの至難なるが故ではあるまいか。つまり人間の通弊として、極端に走りたがり『しつこく』なければ『冷淡』、『冷淡』でなければ『しつこく』。實に中庸を得て、淡泊なる能はざるが爲めであらふ。莊子山木篇に

『君子の交は、淡きこと水の若く。小人の交は、甘きこと醴の如く。君子は淡くして以て親み。小人は甘くして以て絶つ』

とあるが。『早く熱する物は、また早く冷ゆ』と言ひ。『早く燃ゆる物は、盡くること早し』と言ふが如き譬喩も、歸するところ、其の眞意の、這般の裡に存在せるは、容易に察知することが出來やふ。と言つて、婦人に好愛せられんには、君子の交を以てせよと謂ふのでは無い。只夫れ婦人は、驕慢、一筋繩に掛らぬ代物で、熱心なれば、熱心なるだけ、我を遠ざけんと勉め、親切なれば、親切なるだけ、我を疎ぜんとするのだ。古歌に所謂

『ある時はありのすさびに惡くかりき、
無くてぞ人は戀しかりける』

とは、盖し尤も剴切に、婦人の眞情を表白したものと見ることが出來る。惟ふに男子といへども、『うしと見し世の今は戀しき』とか、『むかしを今になすよしもがな』と言つたやうな追懷を、生ぜざるでは無いけれども。而も『無くてぞ人は戀しかりける』などは、婦人獨特の嘆聲である。戀に苦しめ、思ひに泣かしめ、とゝのつまりは、憂苦煩悶、たとへ死せざるまでも、世を果敢み、生を嫌厭し、所謂『在りて無き人』の部類に入らしめ。而る後『無くてぞ人は戀しかりける』なんかと謂ふと來ては、婦人の性情の、如何に我儘勝手なるかは、洵に之れ、察するに餘りあるだらふ。あゝ斯る厄介極まる動物を、妙に崇め奉り、そが一片の愛を受くるを以て、男兒終生の事業なるが如くに思惟するもの、豈に半狂の沙汰ではあるま

いか。佛のラ、ブルーヤー曾て

『婦人は、常に極端に在り――男子に比し、より多く善ならずんば、より多く惡なり』

と言つたが、僕等の見るところでは

『婦人は、常久に男子に比し、より多く惡なり』

と、斷言したいやうな心持がするのだ。と言て、僕敢て、失戀の結果、婦人に對し惡意を挿んで居る爲めでは無い。

※　※　※　※　※　※

如何にして婦人に好愛せらるべきか――斯る重大なる人生問題に對し、そが解決として、僅かに、『婦人の高慢に乘ぜよ』と言ひ、『金離れよき男となれ』と言ひ、『自慢するな』と言ひ、『しつこくするな』と言ふに止まり、他に詳述するところ無き。一見、甚だ粗鹵なる觀あるに似たりといへども。而も人若し、よく此四者に就き、大に工夫し、また大に實行するを得ば、婦人に依りて好愛せらるゝ、何の難きか之れあらんやだ。

且つ男子苟くも、斯くの如くにして、能く婦人の好愛するところとなるを得ば。世に處して宜しく、眞に光榮ある成功者たるを得る、亦決して難しと嘆ずべき所以は無からふ。

第六章　高襟の側面觀

『奇怪なる社會現象』

ハイカラの定義なぞを、彼是書き立てるのは、甚だ大人氣無い話。幼稚園の乳飲兒でも、白頭の御隠居でも、さては深閨に育ちたまふ姫君に至るまで、恐らくハイカラの意義を、悟了して居られぬ方はあるまい。而してハイカラの語たるどう言ふ譯なのか、千人は千人までが頗る惡意に解し

『あんなハイカラに、何が出來るものか』

と、銀行の支配人が輕蔑すれば、

『あんなハイカラを嫁に貰たら、親を餓死させるは受合。』

と、天保爺大に憂慮を懷き、

『ハイカラだけは止めて下さい、輕薄に見えますから。』

と、女學校の校長が、熱涙を灑で說諭すれば

『此の金を費消したのは、屹度ハイカラ番頭だ。』

と、禿頭は飛でも無い即斷を下す始末。實に人生、ハイカラ位つまらぬ境遇は、二つと無い心地がするのだ。

白樂天は、婦人の境遇を憐れみ

『人生莫作婦人身、
百年苦樂由他人。』

とやつつけたが、僕を以て之を見れば、人生何人の境遇が、最も悲慘であると言ても、實にハイカラ位悲慘な境遇は、誓て之無きを斷言するのである。惟ふに百年の苦樂、一に全く他人に由るところの婦人、強ち苦しき一生を送るとは限りまい。實に『氏無くして玉の輿』とは、婦人に於てのみ享有すべき、至大至高の幸福では無いか。今若し斯る婦人を、かの終生輕薄なりと排せられ、無能なりと嘲けられ、人生到る處に於て、蔑視冷遇せらるゝハイカラに比すれば、其幸不幸、蓋し同日の談ではあるまい。

ところで今一歩を讓り、白樂天の言ふが如く、百年其の苦樂を他人に任す婦人を以て、最も悲慘なる生涯を送るべき者としても。男女變性の方法は、如何なる科學に由るも、全然不可能事に屬して居る。即ち一旦婦人と生れた以上、何とも致し方の無い道理である。併しハイカラにありては、全く之と其趣を異にし『生來のハイカラ』なるものが、存在しやう筈は無く。實にハイカラに成ると、成らぬとは、一に全く自身の方寸に在るのだ。若し人あり、

『ハイカラ程、嫌なものは無い。己は皇天に誓を立て、一生ハイカ

ラには成らぬ。』

と決意すれば。たとへ『居は意を移す』にして、永世不易の眞理であればとて。またたとへ、身は之れハイカラの群中に捿んで居ればとて、一たび斯く決意を致せる彼の、遂にハイカラたらずして濟むは、甚だ分明なる事理であらふ。

斯くの如く、ハイカラに成ると成らぬとは、一に全く自己の方寸に依りて決し。而してハイカラの境遇たる、人生にありて至悲至慘なるものたるに拘らず。田舍も都も貴族の姫君も、土百姓の肥太郎も皆な齊しくハイカラに化せられ、所在ハイカラならざるなしと來ては、心ある者誰か

『奇怪なる社會現象だ』

と長嘆息せざるを得るだらふか。

之は別の話だが。由來『戀はくせ者』で、戀するは、即ち其大部分に於て、苦患を忍ぶべきものと、何百何千年の大昔から、ちやんと相場が定つて居りながら。猶ほ『戀せずば、人は心もなからまし』なんかと、けしからん量見違して、小學校の先生も、戀の苦味に切ない思を懷き。耶蘇坊主も、同じく戀の奴隷と酒落込み。斯くて戀故に、元來樂しい筈の人生を、地獄ぢやとか、苦海ぢやとか、飛んだ寐言を吐くに至るのだ。尤も之がため、或は小說家並に詩人等より

『戀は神聖にして、戀に苦しむは、人生唯一の美觀なり。』

なんかと、大に煽ぎ立てらるゝだらふけれど。識者は、斯る戀に苦しむ者を以て、一言の下に『馬鹿な奴』と貶すのである。

僕私に察するところ。戀は苦しきものと知りつゝ、猶ほ戀故に苦しむと同じく。ハイカラの、最も嫌惡すべき名稱たるは、十分知て居ながら、

猶ほ且つ自から、ハイカラたらんとするのは。之れ所謂『怖いもの見たい』てふ、人類固有の『好奇心』の然らしむるところではあるまいか。今に始まつたことでは無いが。さて〳〵人間は、奇怪なる動物である。

『ハイカラ流行の眞相』

世人の、斯くの如く滔々としてハイカラ主義を奉じ。お寺の小僧も、圓い頭に似合はず、ハイカラ風を吹かせ。土肥臭い大根脚の姉さんも、先の赤い獅子鼻に似合はず、矢張りハイカリズムを崇拜し。天上天下、到るところとして、ハイカラを見ざる地なしの觀ある、一見甚だ奇怪なりといへども、今若し靜思熟慮せば、また敢て其所以なしとも謂へまい。前きに、戀とハイカラとを對照して說いたが、今此にハイカラ流行の眞相を說明するに先だち、再び戀に就て、少しく述べて見たい事がある。

由來『口でけないして、心でほめる』とは、實に戀に耽て居る男女の通性で。若し

『妾、あんな怖い顏してる方大嫌いよ。あんな方とでも、結婚せねばならぬ運命なら、今此で死んだ方が、よつぽど幸福と思てよ。』

なんかと嘆つのを眞に受け。

『ほんとにネ、私だつて同じよ。なんて嫌らしい方なんでせう。此の世にあんな男が居るので、人生が長へに慘憺たるんですワ子』

などと同情を表しやうものなら。女同士、まさかに絕交狀は送りまいけれど、早速敬遠策を取らるゝ位は、察するに餘あるところ。兎角女が男をけなし、男が女をけなす場合には、餘程注意して應せぬと、實に意外な失策を演出するもの。之れ蓋し『口でけないして、心でほめる』のが、戀せ

る男女の眞相であるからだ。

而して斯くの如きは、特り戀の上に於けるのみならず、處世上種々なる場合に、甚だ屢々目擊する事實である。されば韓非子は、其著『說難』中に於て

『凡そ說の難きは、說く所の心、吾が說を以て之に當つ可きを知るに在り。』

と斷言し。更に――名高を好む者に對し、之に說くに厚利を以てすれば、下節にして、己を卑賤視する者として、必らず遠ざけられ。また厚利に出づる者に對し、之に說くに名高を以てすれば、無心にして、事情に遠き者として、また必らず遠ざけられ。また陰に厚利を爲し、顯に名高を爲す者に對し、之に說くに名高を以てすれば、陽には用ゐらるるも、實は疎んぜられ。また之に說くに厚利を以てすれば、隱には用ゐらるゝも、顯に棄てらると言て居る。さすがに韓非子、御國人だけあつて、なかなか甘いことを言つたものだ。

今若し韓非子の言を思ひ、はた戀人の、口腹一致せざるを察し。而る後、ハイカラの、誰あつて之を惡まざる無きに拘らず、而もハイカラ風や、滔々として吹き荒まざるの地無く、また人として多少ハイカヲ主義に感化せられざる無きを思はゞ、蓋し茫乎自失せざる者は無からふ。

去りながらハイカラの、表面より之を解すれば、輕薄を意味し、無能を意味し、やがて失敗を意味し、貧窮を意味するに拘らず。何處やら言ふに言はれぬ趣味あるが爲め、吾も人も斯くはハイカラ風を、吹かせたくなるのであらふ。然らば、ハイカラ流行の眞相とは何ぞや――孟子では無いが、『曰く言ひ難し』とでもやつて置かふか。

併し『曰く言ひ難し』では、甚だあつけない話。たとへ屈利屈でも、苟くも

男たる以上は、何とか捏ね出さねば無らぬ道理。況んや韓非子まで引證し、其儘默するなどとは、餘りの腑甲斐なさ、僕の僕たる所以にも耻かしき次第である。

『ハイカラの社會上の地位』

併し幾ら意地張たところで、無い袖は振れぬ筈で ただ僕の所感を、ありの儘に記すことに致そふ。

一體、ハイカラ風を吹かせるのは何の爲めか――實に簡單なる、此の心的作用をさへ解決し得れば、ハイカラ流行の眞相や、極めて容易に悟了し得るだらふ。事實は常に、最も確かな證人。いま、ハイカラ風を吹かせる、其の目的を明解し得んがため、其の事實を掲けて見やう。

新聞記者の田伍作君は、恐らく日本一のハイカラ男に違い無い。若し人ありて『首の廻らぬ苦勞する』てふ定說を、根底より覆すありとするも。田伍作君さへ引きづり出し。『是れでも異議あるか』と咎めたなら、實に何人といへども

『成る程之れでは、ハイカラを亭主に持つ可からずだ。洵に首の廻らぬ苦勞するワイ』

と、大に感歎せざるを得まい。而して此に所謂『首の廻らぬ』の語たる、實に兩相の意義を藏して居るのだ。即ちカラーが高いで、實際首が廻らぬのと、今一つは、ハイカリズムに當然附隨する『借錢』のため首が廻らぬのと、此の二義である。實に田伍作君は、最も分明に、此の兩義を表彰し、如何なる愚夫愚婦をしても、容易に『首の廻らぬ』所以を納得せしむるのだ。

されど田伍作君は、いくら首が廻らなくとも、ハイカラを廢する如き、意

氣地無しでは無い。惟ふに君や、心中に於て

『負債は、信用の表彰では無いか。男兒、負債を厭ふやうでは、全然活社會に活動すべき資格を缺て居る。且つ夫れ、負債を恐怖して、ハイカラを止めるなどとは、さつぱり其の眞意が解せぬ。』

斯く信じ、却りて多大のプライドを感じつゝあるだらふ。而して君の、斯くは狂するばかり、ハイカラ主義を奉體するに至たのは、要するに、スウヰート、ハート（意中の人）てふ、偉大なる目的物があつてのことだ。偉なる哉意中の人よ、大なる哉スウヰート、ハートよ。實に英雄も、意中の人のためには、一命を鴻毛の輕きに比し。善智識も、スウヰート、ハートの爲めには、墮落の闇に、煩悶憂苦の生涯を送るでは無いか。惟ふに、

謠曲『花月』を一讀された諸君は、必らずや

『こしかたより、今の世までも、絶えせぬものは戀といへるくせもの。げに戀はくせ物、くせ物かな。』

の言を、長へに忘るゝことは出來まい。然り、戀は眞にくせ物である。僕心私に察するところ、人生の、斯くの如く失意の人に滿ち、社會の、斯くの如く慘憺を極めたる、其の所以、素より一ならずといへども。而も源因として擧ぐるに際し、其の重且つ大なるものは、實に『戀』てふくせ物であらふ。紀元四世紀の末葉、ラテン詩人として聞えたる、クレーディエーナス、戀の恐るべく厭ふべきを罵り、

『余にして、戀と餓とに苦しまば、余はむしろ餓死せん。』

と、言つたでは無いか、戀は確かにくせ物である。

遮莫、田伍作君の、斯くハイカラを崇拜するに至れる、實に戀の外には、何の譯も無い。あはれ首の廻らぬ苦勞して、最新流行の洋服に浮身を俏せる、はた人には鬼蜮の如くに厭はれ、

『あのハイカラは陰險だぞ。』

なんかとまで排斥せられ、而も猶ほ、盛んにハイカラ風を吹かせつゝある。一に全く意中の人に、好愛せられんが爲めなのである。斯くの如きは、勿論特り田伍作君ばかりでは無い。實に如何なる英雄も、又如何なる善智識も、意中の人に好愛せられんが爲めには、洵に一命を賭するのが常。從て男性女性の別無く、意中の人に依て、感化せらるゝの甚大なるものあるは、眞に愕然として喫驚せざるを得ぬのだ。既に然りとすれば、若し意中の人にして、眞に偉人たり、はた眞に烈婦たらば、爲めに受くるところの感化は、如何なるものであるだらふ。一見甚だ架空的なるに似たれど、こは決して机上に出來た空想では無い。

去りながら現代に在りて、斯る事實もがなと、鵜の目、鷹の目で探偵したところが、その勞は恐らく擧げて水泡に歸するであらふ。要するに現代の男女や戀せらるゝ者、即ち意中の人は、皆な是れ輕浮下節の輩。實に戀人とさへ言へば、見ぬ前から、聞かぬ中に、既に早く、ハイカラぢやらふと推察するに餘りあるのだ。既に意中の人にして、ハイカラのみなりとすれば、ハイカラを戀する者、心ならずもハイカリズムを崇拜せざるを得まい。

ハイカラ流行の眞相は、即ち戀てふくせ物に歸し。之を知ると共に、ハイカラの社會上の地位も、略々推察することが出來るだらふ。

『役所のハイカラ』

既にハイカラ流行の眞相も略々分明したる以上は、各種のハイカラに就きて、側面觀察を遂げたいと思ふ。

而して、若しハイカラなるものが、文明的產物であつて、文明の眞髓は、ま

さにハイカラに於て之を見可く。即ち詳言すれば、ハイカラの隆替は、直ちに以て一國文明の程度を、判定するとでも言たやうな次第なら。僕が側面觀は、必らずやハイカラを皷吹する上に於て、甚大なる効果を奏するであらふ。また若し事實全く之に反し、ハイカラは、道念衰退、社會腐敗の所産にして、一種の道德家並に敎育者等の慷慨して措かざるが如く、爾く有害なるものとすれば。僕が側面觀察は、また必らずやハイカラを撲滅する上に於て、貢献するところ尠少ではなからふ。之れ素より僕の斷言するところである。

先づ近く、役所のハイカラより、始むることに致そう。

斷るまでも無く、一言役所と言つたでは、甚だ意義茫漠、諸君を惑はすものあるに似たれど、而も『いづくも同じ秋の夕暮』では無く、何れも同じ役人氣質。見そぼらしい區役所の前並連も、呼び聲のど英い何々局長連も、所詮大した差別は無いのだ。仍ち其一だに擧ぐれば、常識ある者、他の一般を察するに於て、何の難きか之れあらんやだ。

區役所の前並に、一椅子を占むるの、光榮を有せらるゝ凸助君。御役は確か水道掛。御母君は、仕立物の內職を持たせ玉ふ御身分。君は素より給仕上り、從て人品とか、學識とか言つたやうな點になると、どだい、御話にはならぬけれど。さて一寸駄洒落を吐たり、皮肉な批評を投ずるところは、なか〳〵の黑人、下には置けぬ代物である。

一體近頃の人達は、實地の才能ぢやとか、豐富な經驗ぢやとか言て。矢鱈に青年をして、出來得るだけ早く、實務に從事せしめやうとするが、是は餘程考もものではあるまいか。成る程疊の上の水練が、役に立たぬと等しく、實地に活用せぬ學識、才能、技藝……半文の價値無きは、分り切た話ではあるにしろ。もと〳〵、人間の發育は、矢張り草木と同じやう

一定の時期を經過せねば、決して完成するものでは無い。現に、十八歳の父と十五歳の母、斯んな父母を有する兒童の、多く發達不完全の人たるは、事實の明らかに、證據立つるところ。而して發育不充分なる男女や、其の成すところ悉く不完全。實に吾人の常識は、かの腐儒輩を賤しむと共に、また生熟未成の徒を賤しむもの。或は前者に比し、遙かに多く後者を賤しむのである。

由來、是等生熟の徒や、啻に之を賤しむのみならず、之が悲慘なる現境に對し、はた暗澹たる將來に對し、實に數滴の紅涙を灑がざるを得ぬのだ。試に凸助君に就て之を見るに――たとへ御自身は、月十三圓の報酬を得て滿足し、

『是れでも普通の勞働者とは大差がある。』

なんかと得意の鼻を搖かしたまふかも知れぬが。榮無き職務、望無き地位、心ある者、誰か心私かに

『人さま〳〵の世の中。斯る境遇に滿足して居るとは、さて〳〵情無い青年なる哉。』

と嘆息せざるを得まい。要するに凸助君の如きは、所謂『早熟小成』の徒。而して其の早熟し、小成したる所以のものは、即ち心身共に發育不完全の時に於て、既に早く、世事に從ひたるが爲めである。あゝ、其のこまじやくれた物言ひ振り、いけすかない面附、惟ふに世人の口にする、『齒の根が搖く氣障さ加減』とは、蓋し斯ふいふ連中のことであらふ。

餘談さて措き。『早熟小成』のモデルと見つ可き、凸助君のハイカラ風は、頗る滑稽に出來て居る。先づ斯る徒の常として、洋服は最新流行の大安物。ネクタイは赤。帽子は和製のソフト。實に頭のてつぺんから、足の指先まで『輕薄小才子』の好典型。若し夫れ、しみついたれた財布から、

牛屋で一圓も張り込めば、眞に大盡氣取り。また若し、美人の噂さでも始まらふものなら、口頭泡を散らして、喋々說き去り論じ來たり。宛然、國家の休戚を以て、自己唯一の喜憂とせる國士が、議事堂の演壇に立てるが如き態度。要するに凸助君や、眞面目に議し得べき人間では無いのだ。

ハイカラにも種類は多い。併し役所のハイカラ位、癪に障る厄介物は無からふ。今少しく具體的に言はゞ、即ち役所のハイカラは、之を銀行とか、會社とかのハイカラに比べると、いやに威張り返り、何處までも役人根性が現はれて居る。尤も役人根性が現はれて、いやに威張り返る――之れだけなら、何ら別條も無いが。何となくみそぼらしい風附。要するに、『みそぼらしいハイカラ』とは、實に役所のハイカラに對する、異名と見て差支無いのだ。

『商店のハイカラ』

ハイカラは、素より氣障なものと、相場が定つて居るが。氣障な中でも、商店のハイカラ位、甚だしきは無いぢやらふ。而して此に謂ふ、商店のハイカラ中には、當然、會社のハイカラ、乃至銀行のハイカラ等をも含んで居るのだ。

そも〳〵商店のハイカラの、形體上の特徵は、實に馬鹿げた野呂間面が一つと。夫から猫に舐められたやうな、香油とコスメチックで、てかてかと輝て居る頭が一つ。惟ふに此の兩個の特點は、其のハイカラの商店に屬するものたるを、最も分明に證據立つて居る。而し『のろま面』の方は『みそぼらしきハイカラ』に比し、勿論數段の上位に置くべきものであらふ。

唐物屋――――では無い、洋品舗のハイカラ番頭、氣障雄どん。當年取て二十七歳。君また、前に述べた『みそぼらしきハイカラ』のモデル、凸助君と同じく、心身共に發育不充分の時に於て、既に早く世事に從たゝめ、何處までも早熟小成の『こまじやくれ物』。併し流石は洋品舗に人と成つただけに、一寸小才もきけば、また御世辭も上手。そこで同じ流れを掬める、御主人公の御覺え目出度。何から何まで、氣障雄、氣障雄と、珍重せらるゝ幸福者である。

たしか正月の十一日、藏開きの晩である。當夜は、當家の慣例として、親戚知己、乃至使用人一切を、主人夫婦で招待し、深更に達するまで盛宴を張ることに成て居る。此夜氣障雄どん、一生一度と着飾り、大に氣取て客席に着てござる。

酒數行、人未だ醉はず――――此處が酒宴の盛り時、今半時も經過せば、人樣々の缺點も現はれ、坐は崩れる、席は亂れる。實に酒數行、人未だ醉はず底の際は、酒宴の盛り時と謂つべきだ。

斯くの如きは、種り酒宴のみに限らぬ。實に感興は蓋明前、趣味は八分處にあるもの。

『此世をば誰世とぞおもふ望月の
　かけたることもなしと思へば』

と誇りたる、彼れ關白藤の道長の如きは、惟ふに頗る沒常識な男ではあるまいか。『天道虧盈、而益謙』とは易の諭ふるところである。尤も樂天的生活方法の一種として、何事をも圓滿自由に解釋し、一切萬事、不完全なるものあらずと信じ。若し病氣にでもなれば

『有り難い。何の御慈悲か、病床に臥して、一大休養を得るといふ話。自分位多幸多福な男はあるまい。』

と感謝し。若しまた盜難にでも逢へば

『辱け無い何の御慈悲か、泥棒に依りて、富貴の人と思惟せられ。且つ奪はれてまで、遂に能く其の實を現はすに至つたのだ。光榮何ものか之に如かんや。』

と得意がるのは、ちと狂氣じみては居るものの、またなか〳〵味がある。笑ふ門には福來たり、泣つ面を蜂が刺す。哲人は何と言はふが、宗教家は何と叫ばふが、そんな事はどうでも關はぬ。笑て暮すことさへ出來れば、人生の幸福、此の人の一身に集まれりと、斷言しても差支は無い筈。去りながら、趣味は八分處、感興は常に蓋明前のみに在るのだ。而るに人若し、そが本性の慾張り主義に基き『未だし』『未だし』で、十分は愚か、十二分處にまで達しやうとでもしたら、趣味索然、むしろ却りて、荒凉落漠の歎無きを得まい。こは萬般の事に於てそうだが、殊に目立つのは、實に酒宴の席である。

酒數行、人未だ醉はず。此の趣味多い時に當て、氣障雄どんつと立ち上り、一場の演說――演說と言へば演說ぢやが、何が何だか譯の分らぬ、漢字混りの文句を並べたてたのだ。併し場合が場合なので、兎に角拍手の裡に、あやしい演說を了はることが出來た。聞かされた者は大迷惑。されど御本人の得意は、如何ばかりであつたらふ。

當家の孃樣、高等女學校の五年生、なか〳〵品のよい御令孃で。誰の目にも、之が洋品舖の娘さんだとは見えぬ拵へ方。特り拵へ方のみならず、物言ひ振りも、應對の樣子も、天晴れ高家の姫君。兩親の心中では、一日も早く善い養子して、商賣繁昌、二代三代の後には、屹度日本屈指の富豪たらん豫算である。ところが孃樣、商人が大の嫌ひと來て、今から既